



Title	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2016
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2016. 2018, p. 1-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術

活動報告
2016

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか	1
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について	2
1. 教育プログラムの実施	5
• 大阪大学の取組	6
• 大阪大学 特色ある授業	12
• 京都大学の取組	14
• 京都大学 特色ある授業	18
• 合同講義	20
• 阪大学生の声	24
• 京大学生の声	26
2. プログラム推進委員会の運営	29
• 実施体制	30
• アドバイザー会議	31
• カリキュラムの発展及び拡充	31
• 研究会やイベント開催の企画及び調整	32
3. 拠点間共同プログラムへの参画	37
• サマーキャンプへの参画	38
• 共催：第1回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラム	41
• SciREX 交流研究会	42
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施	43
• 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）	45
• 共催：学術政策セミナー	55
• その他	58
5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施	63
• 阪大拠点プロジェクト	64
• 京大拠点プロジェクト	67
6. 関西ネットワークの発展	71
• ナレッジキャピタル超学校シリーズ	72
• 京大拠点主催：政策のための科学イベント	77
7. 国際連携の推進	79
• 国際連携	80
• 海外調査及び発表等	80
8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）	83
• 大阪大学	84
• 京都大学	91

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものです。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、ともすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立

案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であると考えています。

STiPS 代表 小林傳司(大阪大学)

❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点 (Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere: STiPS)」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012 年 1 月に発足しました。なお、同推進事業には 5 拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

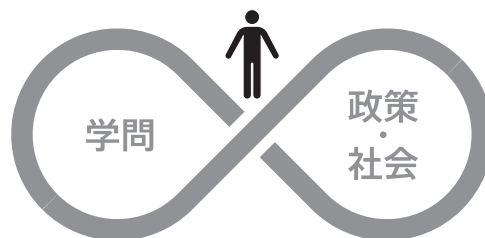
STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPS では、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与 (public engagement)」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



研究拠点としての STiPS

STiPS では、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPS では、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2017年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	理事・副学長	科学哲学、科学技術社会論
星野 俊也	大阪大学大学院国際公共政策研究科	教授	国際関係論、国連研究、米国外交、国際安全保障論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	招聘教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学COデザインセンター	准教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
神里 達博	大阪大学COデザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
辻田 俊哉	大阪大学COデザインセンター	講師	国際政治学、国際安全保障論
渡邊 浩崇	大阪大学COデザインセンター	特任講師	国際政治学、外交史、宇宙政策
工藤 充	大阪大学COデザインセンター	特任助教	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
水町 衣里	大阪大学COデザインセンター	特任助教	科学コミュニケーション論、科学教育
菅原 裕輝	大阪大学COデザインセンター	特任研究員 (非常勤)	研究倫理、科学哲学
京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授	可視化
小寺 秀俊	京都大学大学院工学研究科	教授	マイクロTAS/MEMS
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
カール・ベッカー	京都大学こころの未来研究センター	教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
新山 陽子	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経営学、食品安全、リスク認知
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
高野 潔	京都大学学術情報メディアセンター	教授	情報通信政策
中澤 正彦	京都大学経済研究所	特定教授	金融政策と日本経済、財政政策
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
後藤 励	京都大学白眉センター	准教授	医療経済学、医療政策
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
堀 さやか	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	地球環境学、水ガバナンス
尾上 洋介	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	情報可視化、数理最適化
井出 和希	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	薬学、疫学、社会医学

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

❖ 大阪大学の取組

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016 年 6 月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013 年 4 月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が 2011 年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目 6 単位および選択科目 8 単位以上の計 14 単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

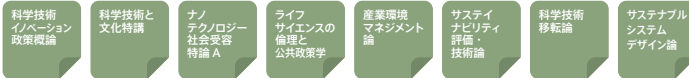
キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国 5 拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく 2013 年 4 月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が 2008 年度から始めたものです。これは、大学院生および 6 年制課程の学部 5、6 年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目 2 単位および選択科目 6 単位以上の計 8 単位以上の修得が必要です。

科学技術イノベーション

科学技術イノベーションを生み出し、社会に応用するプロセスで、何が起ころのでしょうか。
そこで配慮すべきことについて、専門家と共に考えていきます。



公共的問題

科学技術は公共政策の観点からは、どのような役割を果たすのでしょうか。
具体的な事例を題材に、それらを読み解く素養を修得していきます。



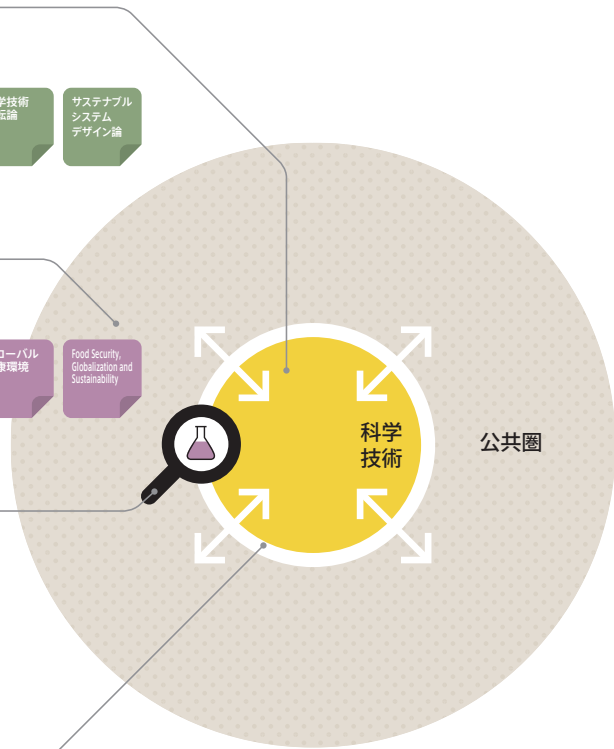
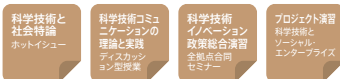
研究法

公共圏における科学技術のあり方を分析するためにどのような理論、概念、方法があるでしょうか。それらを学び、自ら研究やイベントに取り組みます。



コミュニケーション

科学技術に関する公共的問題について、誰が何を主張しているのでしょうか。
コミュニケーションの現場に身を置くと同時に、自身も議論に参加していきます。



大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2016 年度 在籍者数の合計：25 人

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学研究科：2 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：1 人、工研究科学：4 人、基礎工学研究科：2 人、国際公共政策研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学へ就職：2 人、政府・公的研究機関へ就職：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

*副専攻プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、14 単位を修得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、理学研究科：5 人、薬学研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：3 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：11 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：1 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：3 人、基礎工学研究科：1 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：3 人、工学研究科：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学へ就職：1 人、民間企業：2 人）

高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2016 年度 在籍者数の合計：15 人

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、法学研究科：1 人、工学研究科：1 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能研究科：1 人、情報科学研究科：1 人）

修了者数：8 人（進路内訳 不明：8 人）

*高度副プログラムの修了証は、学生が高度副の 8 単位を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されます。そのため、8 単位を修得したものの、主専攻を来年度以降に修了予定の学生数は含まれていません。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：2 人、医学系研究科：3 人、国際公共政策研究科：1 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：0 人

2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 人間科学研究科：1 人、理学研究科：1 人、工学研究科：4 人、基礎工学研究科：3 人、国際公共政策研究科：2 人、生命機能研究科：1 人）

修了者数：3 人

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学研究科：1 人、理学研究科：1 人、医学系研究科：1 人、工学研究科：2 人、基礎工学研究科：1 人）

修了者数：5 人

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2016 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授 業 科 目 名	主担当教員	単位	学期
入門必修科目（2単位）	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術イノベーション政策概論（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	1
必修科目（2単位）	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術コミュニケーションの理論と実践	八木 絵香、他	2	1
連携必修科目（2単位）	CSCD（→COデザインセンター）（院）	研究プロジェクト（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	通年
選択科目Ⅰ： 基軸科目群	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術とコミュニケーション（2013年度名称変更）	平川 秀幸、他	2	1・2
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術社会論基礎（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	1
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術イノベーション政策総合演習（2013年新設）	平川 秀幸、他	2	1
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習（2013年度新設）		2	不開講
	工学研究科（博士前期）	サステイナビリティ評価・技術論（2014年度追加）	東海 明宏、他	2	1
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論（2014年度追加）	草部 浩一	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	多胡 圭一、他	2	2
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術と社会特論（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	2
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術と公共政策（2016年度新設）	平川 秀幸、他	2	2
選択科目Ⅱ： 8単位以上 （選択科目ⅠおよびⅡから、それぞれ2単位以上を履修）	人間科学研究科（博士前期）	科学技術と文化特講	森田 敦郎	2	2
	人間科学研究科（博士前期）	科学技術と文化特定研究Ⅰ・Ⅱ	森田 敦郎	2	1・2
	人間科学研究科（博士後期）	科学技術と文化特別研究Ⅰ・Ⅱ	森田 敦郎	2	1・2
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	2
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	2
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学（2013年度新設）	加藤 和人、他	2	1
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	1
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	1
	基礎工学研究科（博士前期）（ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤 正	2	1
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	1
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	1
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	2
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	プロジェクト演習（科学技術とソーシャル・エンタープライズ）（2014年度追加）	星野 俊也、他	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁 寿和	2	通年
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁 寿和	2	通年
	国際教育交流センター（院）	グローバル健康環境（2014年度追加）		2	不開講
	国際教育交流センター（院）	Food Security, Globalization and Sustainability（2014年度追加）		2	不開講
	全学教育推進機構（院）	ソーシャル・イノベーション：社会ニーズを世界で学ぶ（2014年度追加）		2	不開講

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2016 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授 業 科 目 名	主担当教員	単位	学期
必修科目（2単位）	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術イノベーション政策概論（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	1
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術コミュニケーションの理論と実践	平川 秀幸、他	2	1
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術とコミュニケーション（2013年度名称変更）	平川 秀幸、他	2	1・2
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術社会論基礎（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	1
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術と社会特論（2013年度新設）	平川 秀幸、他	2	2
	CSCD（→COデザインセンター）（院）	科学技術と公共政策	平川 秀幸、他	2	2
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習（2013年度新設）		2	不開講
	人間科学研究科（博士前期）	科学技術と文化特講	森田 敦郎	2	2
	人間科学研究科（博士前期）	科学技術と文化特定研究Ⅰ・Ⅱ	森田 敦郎	2	1・2
	人間科学研究科（博士後期）	科学技術と文化特別研究Ⅰ・Ⅱ	森田 敦郎	2	1・2
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	2
	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	2
	医学系研究科（博士前期）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学（2013年度新設）	加藤 和人、他	2	1
	工学研究科（博士前期）	サステイナビリティ評価・技術論（2014年度追加）	東海 明宏、他	2	1
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	1
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	1
選択科目：6単位以上	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論（2014年度追加）	草部 浩一	2	2
	基礎工学研究科（博士前期）（ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	伊藤 正	2	1
	国際公共政策研究科（博士前期）	公共政策Ⅰ	多胡 圭一、他	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	1
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	1
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	2
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	プロジェクト演習（科学技術とソーシャル・エンタープライズ）（2014年度追加）	星野 俊也、他	2	2
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（人事の経済分析1）	松繁 寿和	2	通年
	国際公共政策研究科（博士後期）	プロジェクト演習（人事の経済分析3）	松繁 寿和	2	通年
	国際教育交流センター（院）	グローバル健康環境（2014年度追加）		2	不開講
	国際教育交流センター（院）	Food Security, Globalization and Sustainability（2014年度追加）		2	不開講
	全学教育推進機構（院）	ソーシャル・イノベーション：社会ニーズを世界で学ぶ（2014年度追加）		2	不開講

❖ 大阪大学 特色ある授業

「科学技術イノベーション政策概論」(1 学期 隔週水曜 5&6 限、2 単位)

本科目では、毎回、各界で活躍するフロンティアをゲストとして招き、科学技術イノベーションが、社会にとってより良いものとして展開していくための諸条件について、講義とディスカッションを通じて立体的に学んでいます。これらにより、科学技術イノベーション政策を考える基礎としての政策過程の実際や、国内外の政策や実践の動向、またイノベーション論の関連分野についての基礎的知識、さらには社会の側のメッセージを科学技術の現場にいかにして伝えるかなど、イノベーションをめぐる広範な論点について、理解を深めています。



2016 年度は、以下のような内容で行いました（ゲストの所属や肩書きは実施当時のもの）。なお、第 6 回と第 7 回は、連携拠点である京都大学の川上浩司教授、小山田耕二教授が講師でした。

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| 第 1 回 (2016 年 4 月 13 日) | 平川 秀幸 (大阪大学 教授) |
| ガイダンス | |
| 第 2・3 回 (2016 年 4 月 20 日) | 小林 俊哉 (九州大学 准教授) |
| 科学技術政策論 | |
| 第 4・5 回 (2016 年 5 月 18 日) | 岸本 充生 (東京大学 特任教授) |
| レギュラトリーサイエンス論 | |
| 第 6 回 (2016 年 6 月 15 日) | 川上 浩司 (京都大学 教授) |
| 医療産業イノベーション論 | |
| 第 7 回 (2016 年 6 月 15 日) | 小山田 耕二 (京都大学 教授) |
| デザイン評価論 | |
| 第 8・9 回 (2016 年 6 月 29 日) | 宮田 由起夫 (関西学院大学 教授) |
| 産学連携論 | |
| 第 10・11 回 (2016 年 7 月 6 日) | 玄場 公規 (法政大学 教授) |
| 環境イノベーション論 | |
| 第 12・13 回 (2016 年 7 月 20 日) | 関根 千佳 (同志社大学 教授) |
| ユニバーサルデザイン論 | |
| 第 14・15 回 (2016 年 7 月 27 日) | 平川 秀幸 (大阪大学 教授) |
| 全体まとめ | |

「科学技術と社会特論」（2 学期 隔週水曜 5&6 限、2 単位）

本科目は、科学技術の進展や社会の状況と、受講生の関心・ニーズを踏まえ、毎年、具体的な科学技術の問題をテーマにした「ホットイシュー科目」です。現代社会における科学技術は、多大な恩恵をもたらすとともに、環境や人間の健康に対するリスクや倫理的問題などをめぐって、しばしば社会的な論争の的になります。こうした科学技術をめぐる社会的対立の複雑なあり方を理解することは、科学技術イノベーション政策の立案や研究開発、社会の多様な立場をつなぐコミュニケーション実践を進めるうえで欠かせません。そのために本科目では、現在、社会的な論争が生じている科学技術の問題（ホットイシュー）を二つ取り上げ、それぞれについて「賛成派」「反対派」といった対立する立場の二人の論客を講師として招き、講義を受けたうえで、受講生および担当教員の間で討論を行っています。



2016 年度は、エネルギーとデュアルユースを題材にしました。

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 第 1 回（2016 年 10 月 5 日） | 平川 秀幸（大阪大学 教授）、小林 傳司（大阪大学 理事・副学長） |
| ガイダンス | |
| 第 2 回（2016 年 10 月 19 日） | 大島 堅一（立命館大学 教授） |
| 原子力発電をめぐる諸問題～コスト問題を中心に～ | |
| 第 3 回（2016 年 11 月 30 日） | 諸葛 宗男（東京大学 教授） |
| 原子力問題の全体像 | |
| 第 4 回（2016 年 12 月 7 日） | 平川 秀幸（大阪大学 教授） |
| 振り返り（エネルギー） | |
| 第 5 回（2016 年 12 月 14 日） | 池内 了（総合研究大学院大学 名誉教授） |
| デュアルユース研究と軍事共同問題 | |
| 第 6 回（2016 年 12 月 21 日） | 角南 篤（政策研究大学院大学 教授） |
| デュアルユース（「多義性」技術）を巡る科学技術イノベーション政策 | |
| 第 7 回（2017 年 1 月 11 日） | 平川 秀幸（大阪大学 教授） |
| 振り返り（デュアルユース） | |
| 第 8 回（2017 年 1 月 18 日） | 平川 秀幸（大阪大学 教授） |
| 全体まとめ | |

京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ” 人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です（図1）。

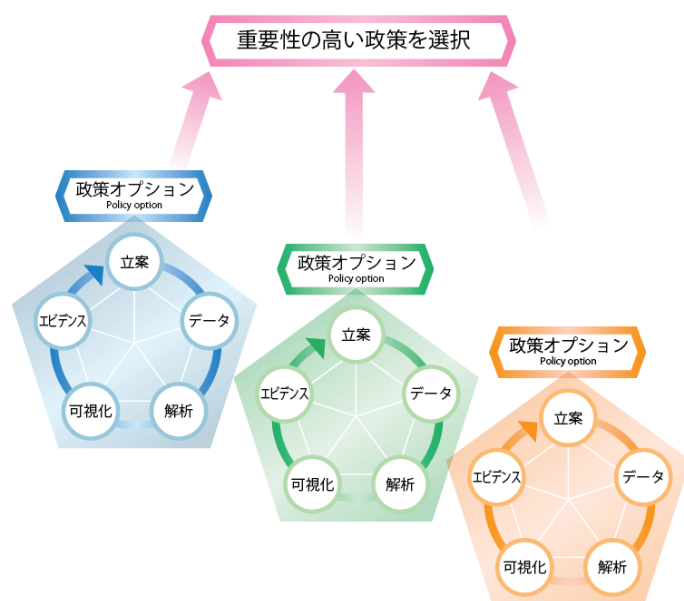


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

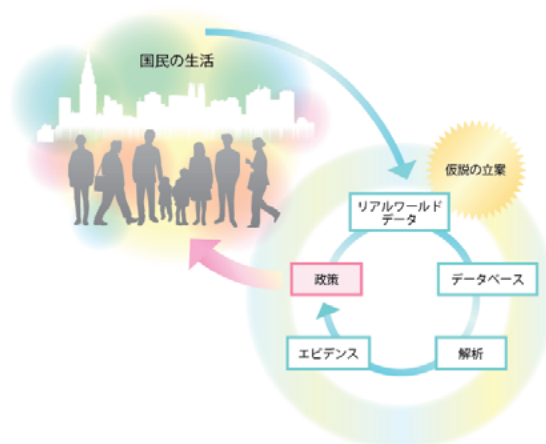


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 「政策のための科学ユニット」 運営状況

研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上）

2016 年度 在籍者数の合計：14 人

履修者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

* 研究科横断型教育プログラムの修了証は、学生が副専攻の 14 単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。この点は大阪大学と京都大学で異なります。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

京都大学 研究科横断型教育プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2016 年度）

区分		科目名	期間		主担当教員（研究科）	単位
			前期	後期		
入門必修科目		現代社会と科学技術		○	川上 浩司（医学研究科）、他	2
連携必修科目		科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	2
必修科目		研究プロジェクト	通年		川上 浩司（医学研究科）、他	2
選択科目（8単位以上）	選択科目Ⅰ…基礎科目群（1科目以上選択）	現代社会と科学技術入門	○		川上 浩司（医学研究科）、他	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上 浩司（医学研究科）、他	2
		情報リテラシー基礎Ⅰ	○		小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品政策・行政		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		問題解決思考		○	末松 千尋（経営管理大学院）	2
		疫学Ⅰ（疫学入門）	○		中山 建夫（医学研究科）	2
		公共政策論ⅠB		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2
		科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング	○		伊勢田 哲治（文学研究科）	2
	選択科目Ⅱ…イシュー科目群（1科目以上選択）	可視化シミュレーション学		○	小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2
		医薬品の開発と評価		○	川上 浩司（医学研究科）	1
		京都学のための科学	○		小山田 耕二（学術情報メディアセンター）	2
		応用経済学		○	依田 高典（経済学研究科）	2
		社会行動論演習 2	○		カール・ベッカー（こころの未来研究センター）	2
		宗教社会・心理学講義 2 [ELSI イシュー科目群]		○	カール・ベッカー（こころの未来研究センター）	2
		社会行動論演習 2 [研究方法論]	○		カール・ベッカー（こころの未来研究センター）	2
		健康情報学		○	中山 建夫（医学研究科）	2
		文献評価法	○		中山 建夫（医学研究科）	1
		比較農業経営論	通年		新山 陽子（農学研究科）	4
		食品安全学Ⅱ	○		新山 陽子（農学研究科）	2
		技術倫理と技術経営	○		榎木 哲夫（工学研究科）、他	2
		医療経済学 A	○		後藤 励（白眉センター）	2
		共生社会環境論演習 3 B		○	佐野 亘（人間・環境学研究科）	2

京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術入門」（前期 木曜 1 限、1 単位）、「現代社会と科学技術」（後期 木曜 3 限、2 単位）

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としている。2013 年度から 2016 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」では、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起こす倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとした。「現代社会と科学技術」では、意思決定と不確実性、データの可視化、ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス、政策としての生命倫理、大学の基礎研究と企業連携、宇宙政策、技術の質の評価、医療技術評価、食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス、幹細胞とイノベーション、科学技術と社会、移植医療などをテーマとしました。

2014 年度からは、レポートには教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。2013 年度はレポートを提出するのみでしたが、積極的な学生が多く自分のレポートに対するコメントを求めていたので、各テーマを担当した教員がレポートに添えて学生にフィードバックするようにしました。

2016 年度の「現代社会と科学技術入門」と「現代社会と科学技術」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術入門」

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 第 1 回（2016 年 5 月 12 日） | 川上 浩司（京都大学 教授） |
| 健康福祉政策と情報の利活用 | |
| 第 2 回（2016 年 5 月 19 日） | 宮野 公樹（京都大学 准教授） |
| 大学における学問とは？ 分野融合・越境のダイナミクス | |
| 第 3 回（2016 年 5 月 26 日） | 小山田 耕二（京都大学 教授） |
| 科学的方法について | |
| 第 4 回（2016 年 6 月 2 日） | 広田 茂（京都大学 准教授） |
| 曲がり角の統計行政 | |
| 第 5 回（2016 年 6 月 9 日） | 小嶋 大造（京都大学 准教授） |
| 政策形成とエビデンス-経済政策を事例に- | |
| 第 6 回（2016 年 6 月 16 日） | 全教員 |
| 研究の進め方 | |
| 第 7 回（2016 年 6 月 23 日） | 中山 建夫（京都大学 教授） |
| 疫学とゲノム科学から社会基盤を考える | |
| 第 8 回（2016 年 6 月 30 日） | カール・ベッカー（京都大学 教授） |
| 現代の医療技術が起こす倫理問題とその政策 | |
| 第 9 回（2016 年 7 月 7 日） | 宮野 公樹（京都大学 准教授） |
| 振り返りワークショップ | |
| 第 10 回（2016 年 7 月 14 日） | 全教員 |
| 研究の進捗確認 | |

「現代社会と科学技術」

- 第1回（2016年10月6日） 加藤 和人（大阪大学 教授）
ライフサイエンス研究の倫理とガバナンス
- 第2回（2016年10月13日） 御手洗 潤（京都大学 教授）
都市政策の立案
- 第3回（2016年10月20日） 佐野 亘（京都大学 教授）
現代民主主義のもとでの政策決定
- 第4回（2016年10月27日） 小山田 耕二（京都大学 教授）
データ可視化と政策立案
- 第5回（2016年11月10日） 平川秀幸（大阪大学 教授）
トランス・サイエンスとParticipatory Technology Assessment
- 第6回（2016年11月17日） 齋藤 永（京都大学 特定准教授）
社会的課題と情報通信技術の役割
- 第7回（2016年11月24日） 全教員
研究の進捗確認
- 第8回（2016年12月1日） 新山 陽子（京都大学 教授）
食品のリスクアナライシスとレギュラトリーサイエンス
- 第9回（2016年12月8日） 依田 高典（京都大学 教授）
「政策のための科学」の計量書誌学データ分析
- 第10回（2016年12月15日） 後藤 励（京都大学 准教授）
医療費の増加と医療技術評価
- 第11回（2016年12月22日） 富田 直秀（京都大学 教授）
技術の質の評価
- 第12回（2017年1月5日） 小寺 秀俊（京都大学 教授）
大学の基礎研究と企業連携
- 第13回（2017年1月12日） 末松 千尋（京都大学 教授）
トランザクション・コストと経済政策
- 第14回（2017年1月19日） 伊勢田 哲治（京都大学 准教授）
クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会
- 第15回（2017年1月26日） 瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）
移植医療の社会的価値
- 第16回（2017年2月2日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）
振り返りワークショップ

❖ 合同講義

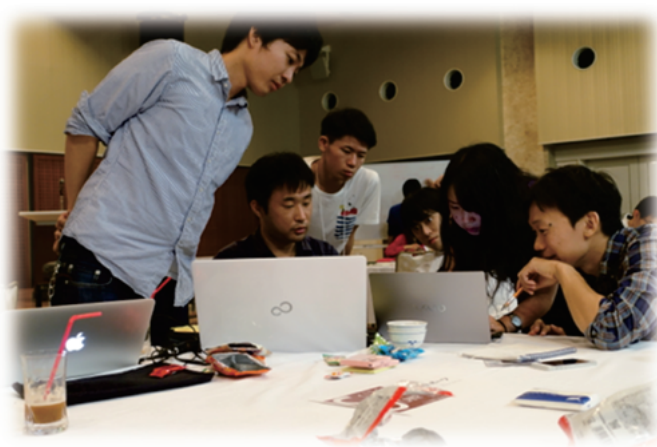
「科学技術イノベーション政策総合演習」（夏期集中、2単位）

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）の拠点間共同プログラムの一つであるサマーキャンプを活用したものです。このサマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組みます。大阪大学ではこのサマーキャンプを科目として単位認定するため、学生に対する事前ワークショップを実施した上で、サマーキャンプに参加するようにしました。この事前ワークショップは、京都大学と一緒に実施しています。

2016年度は、9月9日に事前ワークショップを大阪大学・京都大学合同で行いました。ゲスト講師に、アトリエ・カプリスの岩田直樹さんと岩田花奈さんをお招きしました。



その後、9月15日からのサマーキャンプに参加しました。9月15日から17日にかけてのサマーキャンプは、松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）で開催され、大阪大学からは、学生8人と教職員5人が、京都大学からは、学生10人と教職員5人が参加しました。



「研究プロジェクト」(通年、2単位)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの(日英可)を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2016年度の合同発表会は、2016年12月10日に大阪大学中之島センターにて、大阪大学6人と京都大学6人の合計12人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2016年度 (口頭発表会：2016年12月10日大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準 ―若手研究者に対する探索的調査―
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争 ―日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて―
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について ―物理分野を中心に―
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察 ―ユーザー参加の視点から―
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較 ―過去の河川計画を例として―
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方 ―偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」―

京都大学

- (1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策 ―奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に―
- (4) 自治体議員の研修に関する考察 ―評価グリッド法を用いた分析―
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013 年度 （口頭発表会：2014 年 2 月 19 日大阪大学豊中キャンパスにて）

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム ―「翻訳」、「批判」から「構築」へ―

2014 年度 （口頭発表会：2015 年 2 月 14 日大阪大学中之島センターにて）

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編 ―エネルギーを中心として―
- (2) 科学技術とフィクション ―人工子宮の現実化に寄せて―
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査 ―先行研究を参考に学生側の視点を探る―
- (4) 環境ラベルに関する一考察 ―NL マークを事例にあげて―
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」 ―福島市の事例をもとに―
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件 ―習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化―
- (7) 科学のイメージと PR ―企業広告において「科学的である」とはどういうことか―

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 ―社会の理解のために―
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 ―医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて―
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床 ―応用への実現に関する調査研究―
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定 ―選択型実験による接近―
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化 ―レセプトデータベースを用いた疫学的研究―

2015 年度 （口頭発表会：2016 年 2 月 13 日京都大学楽友会館にて）

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望 ―大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として―
- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化 ―科学技術社会論と古典的自由主義の融合―
- (3) 日本における核融合研究と政策 ―歴史、現状、そして今後に向けて―
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて ―DNA 型証拠と足利裁判―
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査 ―大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認―

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析 ―大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える―
- (2) 問題解決における現場地の重要性 ―自転車シェア事業を手掛かりに―
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望 ―新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に―
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討



阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。大阪大学の入門必修科目「科学技術イノベーション政策概論」において、京都大学の川上浩司教授、小山田耕二教授が講師を務め、京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の平川秀幸教授、加藤和人教授が講師を務めました。

❖ 阪大学生の声

主専攻と STiPS が両輪となり、やりがいを感じることができた。

八巻 高之さん（文学研究科 文化形態論専攻 博士前期課程 2 年）

STiPS の授業の雰囲気は文学研究科の授業とはまた違うもので、社会と密接につながる話題を取り上げるディスカッション型の授業が特に楽しいです。

副専攻プログラムの集大成である「研究プロジェクト」では、なかなか構成が決まらずハードな部分もありました。自分の専門分野と違い「だいたいこのあたりに問題がありそう」という感覚を持っていないので、色々な文献を読んで「ここがおかしいぞ」と見つけていく。そのプロセスが大変でした。一方、実社会の問題解決をどうするか、というところに、多様な角度から切り込んでいけるというのがやっていて楽しかったところです。僕の専門分野は基礎的な倫理学で、「良い」とか「悪い」というものはどういう意味なのか、ということを考えているのですが、それに対して「研究プロジェクト」では応用倫理学系の問題を扱うことができました。自分自身が専門で取り組んだこととちょうど両輪となり、やりがいも感じました。先生にいろいろとアドバイスをいただき、最終的には論文をなんとか形にすることができて、今はホッとしているところです。



STiPS を通して幅広く学んできたことが自分の強み。

大内 詩野さん（医学研究科 医科学専攻 公衆衛生学コース 博士前期課程 1 年）

私は、せっかく阪大に来たのだから阪大でしかできないことをしたい、と思い、副専攻プログラムにチャレンジすることを決めました。自分の視野を広げたい、もっと横断的に学びたい、そういう思いから、やってみようと思うようになりました。

STiPS で学んできて、私と他の人との違いはこうして幅広く学んできていることであり、それこそが自分の強みだ、と考えるようになりました。将来は、幅広い分野で問題解決に携わることのできる仕事について、こういうところでは自分の栄養士としてのスキルが生かせるな、とか、ここだったら公衆衛生の知識が利用できるな、とか、ここだったら科学技術コミュニケーションかな、とか、今までに得た様々なことを生かして社会貢献できるようになりたいです。



また、公衆衛生の分野は、社会の期待と懸念を十分に理解した上でその研究成果を社会の中で生かしていくべき分野だと考えています。私自身も、将来社会に出た時には、自分の専門分野の研究をきちんと世の中に伝えていきたいと思ひますし、科学技術をどうやって利用すべきなのかということについて、ずっと考え続けていきたいです。

研究分野ごとにやり方がある。共通の作法があるわけではないと気付いた。

秦 大さん（工学研究科 応用化学専攻 博士後期課程 1 年）

僕は、自分の専門分野と STiPS での学びはあまり重なっていないと感じています。別の世界、という感覚に近いです。STiPS の授業で議論に参加しているときと研究をしているときでは、使っている思考パターンが全然違います。研究においては、何かしらのロジックを基に現象を捉えていくという思考をしていますが、STiPS の授業に参加しているときは、その場で話す感触というか、瞬発力というか、そういったものを感じたり、それらに反応したりしていると思います。



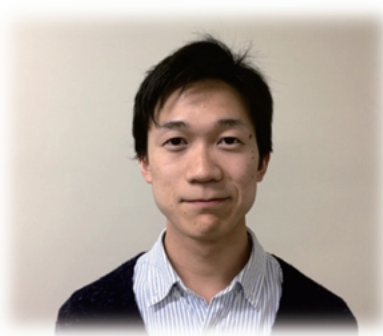
STiPS のディスカッションには様々なバックグラウンドをもつ人が参加していて、思考としてそれぞれのバックグラウンドが議論の中に滲み出てくる。おそらく、僕自身も、僕のバックグラウンドをその場で表出しているのでしょうね。毎回「そんな切り口もあるのか」という驚きや発見があります。他の人のもつ自分とは違う視点を知って初めて、自分の視野はまだまだ狭いのだな、と実感します。ディスカッションの内容によっては、自分からは新しい観点を提供できないときもあるのですよ。そういう「ついていけない経験」もしながら、STiPS を楽しんでいます。

🍷 京大学生の声

様々な視点からたくさんの意見が挙がる

高保 健太さん（人間・環境学研究科 関連環境学専攻 修士課程1年）

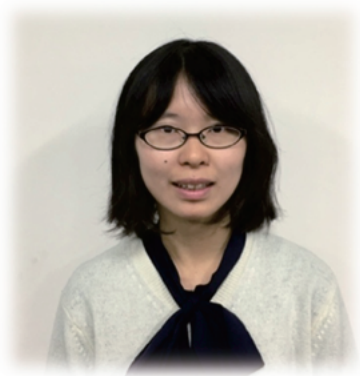
「つなぐ人材を育てる」これがSTiPSのコンセプトです。学問・研究分野が細分化されすぎてしまった今、似たような研究をする人が増える一方で、そこには何のつながりもなく狭い世界しか見えなくなっています。様々な分野の知識・経験を持ち、これらを理解できる人材はこれからの社会に必要とされる存在だと考えます。STiPSには様々な研究科から専攻の違う多様な人が集まるため、授業中一つの議題について話し合う時も様々な視点からたくさんの意見が挙がりとても刺激を受けます。私は化学を専攻としており、これまで政策とは何のつながりもなく過ごしてきました。しかし、大学院は専門分野を深めるだけでなく、自身の視野を広げる期間にしたいと考えていた私にとって、STiPSは大学院生活をととても充実したものにしてくれています。またSTiPSでは政策をただ考えるのではなく、実際のデータ等を用いてエビデンスベースで仮説を立て、それを検証する。そこから得られるデータを分析し、それをもとに仮説をたてなおすといった科学的な思考力も必要であり、またこれを培うことができる場です。私は本プログラムで、災害時における研究者の情報発信の在り方について研究を行っています。特に東日本大震災での福島原発事故を題材に、社会を混乱させた世間の間違った認識や根拠のない風評被害に対して研究者がどうあるべきかを考えようと思っています。



強みは得られる機会の多さ

小林 沙織さん（理学研究科 物理学・宇宙物理学専攻 修士課程1年）

「異分野をつなぐ」という言葉に惹かれて、本プログラムに興味をもったのは、私だけではないでしょう。科学と社会をつなぐことのできるような人になりたい、そう考えた私は受講を決心しました。私の主専攻は物理学。今まで「科学」は勉強してきたけれど、「社会」については主に教職課程の一環でしか学んだことがなく、受講当初は刺激が多い一方、苦勞することも多々ありました。しかし、様々な分野を専攻する同期のメンバーと支え合いながら、そして先生方からアドバイスをいただきながら、それらを乗り越えてきました。ハードであった分だけ、得るところも大きかったように思います。本プログラムの強みを1つ挙げるとすれば、得られる機会の多さです。日々の講義や議論、サマーキャンプでのグループワーク、等々。これらを通じて、ディスカッション能力をつけたり、他分野についての理解を深めたりすることができました。また、研究プロジェクトでは、3.11以降の放射線影響に関する情報発信について、Twitter データの解析をもとに考察しようと考えています。このような研究ができるのは、本プログラムならではのと言えるでしょう。主専攻との折り合いをうまくつけることは難しいですが、自身のできる範囲でチャレンジすることで、きっと実りがあると思います。



新たな視点や気づきが生まれる

三木 竜介さん（医学研究科 社会健康医学専攻 専門職学位課程 1年）

私は医師として社会人を経た後に、公衆衛生を学ぶために大学院に入学しました。公衆衛生分野は行政との関わりが深いため、政策のための科学というプログラム名に惹かれて受講を決めました。医学領域では「根拠に基づいた医療」が一般的ですが、本プログラムでも社会的課題を解決するための政策決定に科学的根拠を用いることを学びます。私が考える本プログラムの最大の特徴は、研究結果や科学技術を実社会に実装することが最終目標に設定されているため、倫理的・法的・社会的問題を軸に政策判断を下すことが意識されている点です。つまり、科学的根拠だけではなく、社会との合意を形成しつつ政策立案から実行に移すプロセスが学べるということです。また、主専攻の人間とは異なった専門分野の人たちと議論を交わすことにより、新たな視点や気づきが生まれることも大きな魅力の一つです。さて、私が現在研究プロジェクトとして取り組んでいるのは、「事前指示書」の普及についてです。高齢化社会を迎える日本で、自分の望む最期が迎えられないことは大きな社会的課題です。本人の希望が叶えられるよう、健康なうちに意思表示をしておく「事前指示書」をいかにして社会に普及させるかをテーマに、政策に繋がる科学的根拠を示せればと考えています。



2. プログラム推進委員会の運営

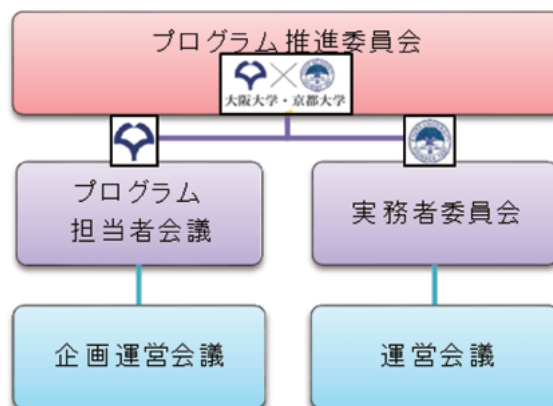
2. プログラム推進委員会の運営

❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。

阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012 年より、毎年 3 回から 4 回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2016 年度は 6 月 15 日、9 月 15 日、12 月 10 日の計 3 回実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間合同事業に関する調整を行っています。



各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主にコミュニケーションデザイン・センターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

❖ アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。アドバイザー・メンバーは下記の4名です。

- ・鈴木 寛 文部科学大臣補佐官、東京大学公共政策大学院 教授、慶應義塾大学政策メディア研究科兼総合政策学部 教授
- ・古川 俊治 自民党参議院議員、医学博士、弁護士、慶應義塾大学 教授
- ・鷲田 清一 京都市立芸術大学 理事長・学長
(アドバイザー会議設置当時は、大谷大学文学部 教授、前大阪大学総長)
- ・三木 孝 神戸市保健福祉局長

❖ カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGO などの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は21、うち新設科目数は7でしたが、2014年度の開講科目数は30、うち新たに追加した科目数は9となりました。2015年度の開講科目数は29となり、2016年度の開講科目数は32でした。京都大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は22、うち新設科目数は5でしたが、2014年度の開講科目数は1科目追加し23科目となり、2015年度の開講科目数は23、2016年度の開講科目数は25でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件14単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013年3月27日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

❖ 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	場所	主催等
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)			
【第 16 回 STiPS Handai 研究会】 ライフサイエンス研究の倫理的・社会的課題について考える～ゲノム編集技術のヒト受精卵への応用を中心に～	2016 年 7 月 19 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 C	主催：STiPS * 大学院生対象の授業「科学技術とコミュニケーション」の一環として開催。
【第 17 回 STiPS Handai 研究会】 科学技術政策におけるユニバーサルデザインの重要性～超高齢社会のビジネスチャンス！～	2016 年 7 月 20 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 C	主催：STiPS * 大学院生対象の授業「科学技術イノベーション政策概論」の一環として開催。
【第 18 回 STiPS Handai 研究会】 福島原発事故を防げなかった科学ジャーナリズムの弱さ	2016 年 7 月 21 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 1 階 カルチ エ・ミューラ ング	主催：STiPS
【第 19 回 STiPS Handai 研究会】 Roles of universities in promoting local communities' engagement with science in France and Japan	2016 年 7 月 22 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 D	主催：STiPS
【第 20 回 STiPS Handai 研究会】 Global issues and science policy: What role for science diplomacy?	2016 年 10 月 28 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催：STiPS * 大学院生対象の授業「科学技術と公共政策」の一環として開催。

【第 21 回 STiPS Handai 研究会】 Science in Society: Recent Trends and Future Challenges	2016 年 11 月 1 日	大阪大学テク ノアライアン ス棟 1 階 交 流サロン	主催 : STiPS * 大学院生対象の授 業「科学技術とコミ ュニケーション」の 一環として開催。
【第 22 回 STiPS Handai 研究会】 文部科学省における政策立案・政策形成	2016 年 11 月 18 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催 : STiPS * 大学院生対象の授 業「科学技術と公共 政策」の一環として 開催。
【第 23 回 STiPS Handai 研究会】 日本の医療分野における研究開発～ゲノム研 究・医療に関する政策を中心に～	2016 年 11 月 25 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	主催 : STiPS * 大学院生対象の授 業「科学技術と公共 政策」の一環として 開催。
【第 24 回 STiPS Handai 研究会】 企業のビジネスやデザイナーの創作を支える意 匠行政	2017 年 1 月 12 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 D	主催 : STiPS
SciREX 交流研究会			
第 2 回 SciREX 交流研究会	2016 年 7 月 28 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 1 階 カルチ エ・ミューラ ング	主催 : STiPS、政策研 究大学院大学
ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル			
【対話で創るこれからの「大学」第 5 回】 一歩先の未来を描くために : 異分野の視点や知を 集める	2017 年 2 月 2 日	ナレッジキャ ピタル カフ ェラボ (グラ ンフロント大 阪)	主催 : 一般社団法人 ナレッジキャピ タル、株式会社 KMO、 大阪大学 C0 デザイ ンセンター 共催 : STiPS

【対話で創るこれからの「大学」第6回】 アイデアをかたちに：人類進化ベッドのつくり方	2017 年 2 月 17 日	ナレッジキャピタル カフェラボ（グランフロント大阪）	主催：一般社団法人 ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、 大阪大学 CO デザインセンター 共催：STiPS
【対話で創るこれからの「大学」第7回】 現場の枠を飛び越える：実践と政策のつなぎ方	2017 年 3 月 1 日	ナレッジキャピタル カフェラボ（グランフロント大阪）	主催：一般社団法人 ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、 大阪大学 CO デザインセンター 共催：STiPS
【対話で創るこれからの「大学」第8回】 つながりを研究する：「つなぐ人」がもたらす価値	2017 年 3 月 16 日	ナレッジキャピタル カフェラボ（グランフロント大阪）	主催：一般社団法人 ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、 大阪大学 CO デザインセンター 共催：STiPS
学術政策セミナー ―大学のこれからを考える―			
【第4回学術政策セミナー】 経営を支えるマネジメント人材とは	2016 年 9 月 9 日	大阪大学テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン	主催：大阪大学経営 企画オフィス URA プロジェクト 共催：STiPS
【第5回学術政策セミナー】 大学の研究力の測定と可視化	2016 年 11 月 25 日	大阪大学テクノアライアンス棟 アライアンスホール	主催：大阪大学経営 企画オフィス URA プロジェクト 共催：STiPS
【第6回学術政策セミナー】 IR の深化と IR との共創	2017 年 2 月 23 日	大阪大学最先端医療イノベーションセンター棟 3F 演習室 1, 2	主催：大阪大学経営 企画オフィス URA プロジェクト 共催：STiPS

その他			
文学部哲学・思想文化学専修 新入生歓迎企画 アラン＝マルク・リュ氏講演会	2016 年 4 月 14 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 1 階 カルチ エ・ミュルチ ラング	主催：大阪大学文学 部哲学・思想文化学 専修 共催：STiPS
第 2 回「哲学対話実践の社会接続の可能性？」	2016 年 6 月 11 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 2 階 セミナー 室 A	共催：科研費「被災 地における『哲学的 対話実践』の理論的 基礎付けと展開」、 STiPS
公開セミナー「原子力表象をめぐって」	2016 年 8 月 8 日	大阪大学全学 教育推進機構 ステューデント コモンズ 1 階 カルチ エ・ミュルチ ラング	主催：大阪大学文学 部哲学・思想文化学 専修 共催：STiPS
第 13 回科学コミュニケーション研究会 年次大会 「科学コミュニケーションとキャリアパス」	2016 年 9 月 5 日	ナレッジキャ ピタル カンフ ァレンスルー ム(グランフロ ント大阪)	主催：科学コミュニ ケーション研究会 共催：STiPS 後援：天文教育普及 研究会
RIHDS セミナー「倫理的側面から今後のヘルスケア研究を考える」	2016 年 11 月 8 日	イイノホール	主催：一般社団法人 ヘルスケア・データ サイエンス研究所 共催：京都大学際融 合教育研究推進セン ター 政策のため科 学ユニット、株式会 社日本医療データセ ンター
京都大学/大阪大学 STiPS・東京大学 STIG 連携セ ミナー「医学分野の産学連携での研究活動におけ るリスクマネジメント～最前線で活躍する研究 者を支える仕組みとするために～」	2016 年 12 月 16 日	京都大学国際 科学イノベー ション棟 会 議室	主催：STiPS、東京大 学 STIG

第1回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラム	2017年 1月24日、 25日	イイノカンファレンスセンター	主催：SciREX センター 共催：NISTEP、JST-RISTEX、JST-CRDS、GIST、STIG、IMPP、STiPS、CSTiPTS
公開セミナー「SDI 構想と対峙した専門家たち—Computers in Battle を読む」	2017年 2月24日	大阪大学全学教育推進機構 ステューデントコモンズ1階 カルチエ・ミューティング	主催：大阪大学文学部哲学・思想文化学専修 共催：STiPS 企画：哲学・思想文化学専修 中村ゼミ
中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会	2017年 3月22日	京都大学医学部G棟3階335 演習室	主催：京都大学際融合教育研究推進センター 政策のため科学ユニット

3. 拠点間共同プログラムへの参画

3. 拠点間共同プログラムへの参画

❖ サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。

2016 年度

実施日：2016 年 9 月 15 日から 17 日（事前ワークショップは、9 月 9 日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生 8 人と教職員 5 人、京都大学からは学生 10 人と教員 5 人

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013 年度

実施日：2013 年 8 月 23 日から 25 日（事前ワークショップは、8 月 21 日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 3 人、京都大学からは学生 6 人と教員 5 人

2014 年度

実施日：2014 年 8 月 31 日から 9 月 2 日（事前ワークショップは、8 月 27 日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生 7 人と教員 9 人、京都大学からは学生 9 人と教員 6 人

2015 年度

実施日：2015 年 8 月 21 日から 8 月 23 日（事前ワークショップは、8 月 19 日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員 4 人および学生 7 人、京都大学からは学生 5 人と教員 4 人

2016 年度の体制

主催：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

共催：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター（CSTIPS）

2016 年度の実施内容（趣旨）

東日本大震災から、5 年という月日が経って間もなく、熊本地震が発生しました。日本は地震大国であると同時に、少子高齢化、過疎化といった問題を抱え、地方創生の重要性も各地で叫ばれています。ここ 10 年の間に起きた大地震は、いずれも、地震発生前から、このような問題を抱えていた地域を襲いました。SciREX サマーキャンプ 2016 では、元どおりに戻すことではなく、地域の問題を解決しながら、あたらしいアイデアや事業を創造することを復興と呼び、さまざまなテーマを通じて、科学技術イノベーション政策と震災復興に関連した議論を行います。



事前ワークショップの様様



サマーキャンプの様様

サマーカーンプのプログラム

	9月15日(木)	9月16日(金)	9月17日(土)
午前		7:00- 朝食 8:30- サイトビジット	7:00- 朝食、朝食後 グループワーク 4) 最終発表準備 9:50 チェックアウト後、松島一の坊から、目の前の文化観光交流館に移動 10:00 グループワーク最終発表会(松島町文化観光交流館にて)
午後	12:30- 野蒜バスツアー 14:00- 開会式(松島一の坊コンベンションホール松島にて) 14:30- 講義: 永田晃也教授(九州大学) 15:00- 講義: 川上浩司教授(京都大学) 15:30- アイリスオーヤマのご紹介: 米倉誠一郎教授(一橋大学) 16:00- 講演: 大山健太郎会長(アイリスオーヤマ) 17:00- グループワーク始動 18:00 宿泊部屋に移動 18:30- 懇親会(松島一の坊 みどりの風にて) 20:15- グループワーク 1: 視察戦略会議(松島一の坊 コンベンションホール前 中会議室にて) 21:30- 自由時間	14:00- グループワーク 2: 中間発表の準備(松島一の坊 コンベンションホールにて) 17:00- 中間発表会(松島一の坊 コンベンションホールにて) 19:00- 夕食(グループごと) 20:00- グループワーク 3: 最終発表準備(松島一の坊 コンベンションホール前 中会議室にて) 23:00- 就寝	12:00 昼食会場への移動 12:30- 昼食(松かま本舗 ございんやにて) 13:00- 表彰式+閉会式 14:00 解散

共催：第1回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラム

第1回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラム「エビデンスから考える未来社会への戦略とシナリオ」(主催：政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策研究センター (SciREX センター)) が、2017年1月24日、25日に開催されました。

本拠点は、企画セッション2件とポスター発表2件に関わりました。

1日目 プレセッション内 企画セッション

○タイトル：萌芽的科学技術の社会的課題検討のあり方を考える：政策立案者の視点から

○日時：2017年1月24日(火) 11:10～12:50

○場所：イイノカンファレンスセンター 会場B3(東京都千代田区)

○セッションオーガナイザー：平川 秀幸(大阪大学C0デザインセンター 教授)

萌芽的な科学技術の研究開発を推進するにあたり、研究開発の実施および成果の利用にともなう倫理的・法的・社会的な課題(ELSI)への対処が適切でなかったことで、研究開発にブレーキがかかるケースが、国内外問わず発生している。本拠点間連携プロジェクトでは、政策立案者が、研究開発や関連する施策・事業の進捗段階に応じてELSIを特定し、問題対応するのを支援するためのツールの開発を行っている。今回のワークショップでは、開発中のツールのうち、特に超スマート社会を実現する上で重要となるデータ利活用のための科学技術(ビッグデータ、監視技術など)を題材としたものをパイロット版として紹介する。その上で、他分野の萌芽的な科学技術も視野に入れて、政策実務のニーズに即したツールの改善や活用法について、政策立案や研究支援に携わる参加者の皆さまと議論するとともに、それぞれの分野におけるELSIについて情報共有を図りたいと考えている。(企画セッションの概要より)

2日目 第2部内 企画セッション

○タイトル：医療政策と医療データの蓄積・共有

○日時：2017年1月25日(水) 9:30～11:30

○場所：イイノカンファレンスセンター 会場A(東京都千代田区)

○セッションオーガナイザー：森田 朗(政策研究大学院大学 SciREX センター プログラム・マネージャー、国立社会保障・人口問題研究所 所長、東京大学 名誉教授)、川上 浩司(京都大学大学院医学研究科 教授)、森川 想(政策研究大学院大学 SciREX センター プログラム・マネージャー補佐、東京大学工学系研究科社会基盤専攻 助教)

情報通信技術の発展によって政策に関するデータの蓄積と共有が容易になる中、医療に関するデータの蓄積と共有、その利活用が注目を集めている。本企画セッションでは、社会保障政策の設計や、医療情報の蓄積と共有に携わってきた三名の専門家に講演をいただき、医療に関するデータの蓄積・共有にはどのような可能性と課題があるかについて議論する。セッションでは、(1)医療情報の政策への応用可能性についての全体像を把握し、課題について考えるためのフレームワーク、(2)医療・健康データの利活用と社会保障の行財政制度との関連や、政策を立案・実施する場合の障壁、(3)行政健康資料の可視化に関する実践的な取り組みと現場での反応、の三つのテーマについて、講演者からそれぞれ紹介と問題提起を行った後、討論者やフロアも交えて議論を行う。セッションには、メディア関係者や個人情報法

制に携わる法務関係者も招聘する予定である。(企画セッションの概要より)

1 日目 ポスターセッション

○日時：2017 年 1 月 24 日 (火) 17:00～18:00

○場所：イイノカンファレンスセンター 会場 B (東京都千代田区)

STiPS 全体の紹介ポスター

「“つなぐ人材”を育てるために：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS) の特色」

STiPS 京大拠点が実施している拠点間連携プロジェクトの紹介ポスター

「自治体の持つ学校健診情報の可視化とその利用に向けての基盤構築」

SciREX 交流研究会

SciREX 交流研究会は、「科学技術イノベーション政策のための科学 (SciREX)」コミュニティの発展を目指して立ち上がった研究会です。

第 1 回は 2016 年 5 月 27 日に、政策研究大学院大学において実施されました。

第 1 回 SciREX 交流研究会

○タイトル：STS 的発想とは？

○講演者：小林 傳司 (大阪大学 理事・副学長)

○日時：2016 年 5 月 27 日 (金) 18:00～20:00

○場所：政策研究大学院大学 3 階 3C 会議室

○主催：政策研究大学院大学、一橋大学 ノベーションマネジメント・政策プログラム (IMPP)

第 2 回は、2016 年 7 月 28 日 (木)、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ 1 階カルチエ・ミュルチラングにて開催しました。SciREX 基盤的研究・人材育成拠点に関わる大阪大学・京都大学 STiPS から 9 人、STiPS 以外の SciREX 基盤的研究・人材育成拠点 (政策研究大学院大学 GIST、一橋大学 IMPP、東京大学 STIG、九州大学 CSTIPS) から 14 人、文部科学省から 1 人、科学技術振興機構から 1 人、その他、大学院生や STiPS の修了生 3 人、計 28 人 (講演者含む) が参加しました。

第 2 回 SciREX 交流研究会

○タイトル：経営学者からみた STI 政策

○講演者：青島 矢一 (一橋大学イノベーション研究センター 教授)

○日時：2016 年 7 月 28 日 (木) 16:30～18:00

○場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構

ステューデントコモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング

○主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)、政策研究大学院大学

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的問題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、本拠点の参画教員が中心となり、ELSI や公共的関与に関する研究成果を学術論文や学会報告などを通じて多数発表してきました。2016 年度の参画教員別の研究業績の詳細については、「8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）」を参照ください。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2016 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。また、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを昨年度に引き続き実施しました。学術政策セミナー、「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）につきましては本章を、ナレッジキャピタル超学校シリーズなどにつきましては、「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

❖ 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)

学際的教育が有効に機能するために、授業を担当する教員が、他の教員の教えている内容を知ることが有益です。しかし実際には、学生は様々な参画教員の授業を受け、異なる領域の知見に触れることができますが、参画教員同士がそうした経験をする場は限られています。この STiPS Handai 研究会は、学内外の研究者を招き、学生だけでなく教員が相互に学び合うことを目的とした、少人数の議論を中心とした研究会です。これをきっかけに学内を中心に協力教員の輪を拡充するとともに、相互理解を深めていくことが期待されます。2016 年度は 9 回実施しました。

第 16 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：ライフサイエンス研究の倫理的・社会的課題について考える～ゲノム編集技術のヒト受精卵への応用を中心に～
- ゲスト：加藤 和人（大阪大学大学院医学系研究科 医の倫理と公共政策学分野 教授、京都大学物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS) 科学コミュニケーショングループ 特任教授）
- 日時：2016 年 7 月 19 日（火）14:40～16:10
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2 階 セミナー室 C
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2016 年 7 月 19 日（火）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2 階 セミナー室 C にて、第 16 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)「ライフサイエンス研究の倫理的・社会的課題について考える～ゲノム編集技術のヒト受精卵への応用を中心に～」を開催しました（大学院生対象の授業「科学技術とコミュニケーション」の一環として開催）。今回のゲストは、加藤和人教授（大阪大学大学院医学系研究科 医の倫理と公共政策学分野）。授業の受講生 8 人（大学院生 7 人、社会人 1 人）に加えて、8 人（大学院生 2 人、教職員 6 人）、計 16 人が参加しました。

まずは、ゲノム編集が取り上げられた回の NHK「クローズアップ現代」（2015 年 7 月 30 日放送、「いのち」を変える新技術 ～ゲノム編集 最前線～）の一部を見ながら、ゲノム編集技術が活用されつつある様々な事例について学びました。その後、ゲノム編集技術のメリットと課題、特に、ヒトの生殖細胞系列（つまり、世代を越えて伝わるような遺伝子改変）について、考えてみました。これを推進した場合、どんなメリット／デメリットがあるのだろうか。ということ、まずは個人で考え、そして、その後グループで話し合いました。



グループで話し合った意見を発表した後は、加藤先生から、現在世界の研究者たちがどのような声明を出しているのか、日本の状況はどうなっているのか、といったことをご紹介いただきました。例えば、日本の含む約 20 か国から 500 名近くが参加して、ヒトのゲノム編集について議論した会議「International Summit on Human Genome Editing」(2015 年 12 月 1-3 日に開催)が出した声明には、以下のように触れられているそうです。

- ・ 基礎研究 (体細胞・生殖系列いずれも) は適切な規制のもと進めるべき。
- ・ 臨床応用は体細胞について有益であるが、生殖細胞系列の世代を超えたゲノム改変は現時点では認められない (将来現時点では認められない (将来にわたって禁止ということではない))。

これからも、様々な観点からの議論が必要なテーマです。

この研究会に参加した学生さんからは「賛成・反対どちらの意見も聞ける前提で授業が作られていて良かった。」「ヒトゲノム編集について、医学部だけではなく他分野の人の意見を聞くことができ興味深かったです。」といった感想が寄せられました。



第17回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：科学技術政策におけるユニバーサルデザインの重要性～超高齢社会のビジネスチャンス！～
- ゲスト：関根 千佳（同社大学大学院総合政策科学研究科 教授、株式会社ユーディット（情報のユニバーサルデザイン研究所） 会長兼シニアフェロー）
- 日時：2016年7月20日（水）16:20～19:30
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ2階 セミナー室C
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2016年7月20日（水）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ2階 セミナー室Cにて、第17回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「科学技術政策におけるユニバーサルデザインの重要性～超高齢社会のビジネスチャンス！～」を開催しました（大学院生対象の授業「科学技術イノベーション政策概論」の一環として開催）。今回のゲストは、関根千佳教授（同社大学大学院総合政策科学研究科）。授業の受講生20人（大学院生19人、社会人1人）に加えて、7人（大学院生1人、教職員4人、ノートテイク2人）、計27人が参加しました。

関根先生がユニバーサルデザインに取り組むようになったきっかけについてのお話から始まりました。これからますます高齢化していく世界を見据えて、今何をすべきか、ということを考えるきっかけになるようなお話でした。前半は、電動アシスト自転車の例、どんな人でも利用しやすい温泉旅館の例など、イメージしやすい具体例を交えながら、ユニバーサルデザインの重要性についてご紹介いただきました。また、アメリカで1998年に改正された「リハビリテーション法508条」がもたらした影響についても学びました。そして、後半は、社会システムとしてどのように超高齢社会に対応すべきか、というスケールの大きなお話でした。



この会に参加した学生さんからは「ダイバーシティーがイノベーションの原点」という言葉は今までに聞いたこともあったが、今日の授業を経て深く実感することができた。」「ユニバーサルデザインが結果として購買層の拡大、美しさを生むものなのということは初めて学んだ」といった感想が寄せられました。

第18回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：福島原発事故を防げなかった科学ジャーナリズムの弱さ
- ゲスト：添田 孝史（科学ジャーナリスト（元・朝日新聞科学部））
- 日時：2016年7月21日（木）18:30～20:30
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントcommons 1階 カルチエ・ミューラチラング
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2016年7月21日（木）、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントcommons 1階 カルチエ・ミューラチラングにおいて、第18回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「福島原発事故を防げなかった科学ジャーナリズムの弱さ」を開催しました。STiPSの教員、大学院生、STiPSの修了生など14人が参加しました。今回のゲストは、添田孝史さん（科学ジャーナリスト（元・朝日新聞科学部））。大阪大学の卒業生です。21年間、朝日新聞で記者としてお仕事をされた後、2011年からフリーランスの科学ジャーナリストとしてご活躍されています。

研究会の前半1時間は、添田さんからの話題提供でした。福島第一原子力発電所は、2011年3月に起きた津波で全電源が喪失してしまった訳ですが、この事故を科学記者が予見できたかもしれないのに、できなかった。それはなぜなのだろう。ということを経験や当時の新聞記事の内容をご紹介いただきながら、説明をしていただきました。



そして、後半1時間は、参加者を交えたディスカッションが行われました。「そもそも、これまでにメディアが事故を先取りできて、未然に防ぐことができた、という事例はあるのだろうか?」「科学ジャーナリズムの弱さ」というより、「日本のジャーナリズムの弱さ」なのではないか?」「科学ジャーナリストを養成するためには何を教えた方がいいのだろうか?」など、様々な質問やコメントが出ました。

現在の科学報道のあり方に、構造的な課題があることは分かっているものの、その状況をどう改善していったらいいのか・・・研究会の後の懇親会では、こんな議論で盛り上がっていたはずですが。

第19回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル: Roles of universities in promoting local communities' engagement with science in France and Japan
- ゲスト: Davy Lorans (リヨン大学サイエンスショップ プロジェクトマネージャー)
- 指定討論者: 春日 匠 (大阪大学 CO デザインセンター 招聘研究員)、吉澤 剛 (大阪大学大学院医学系研究科 准教授)
- 司会進行: 平川 秀幸 (大阪大学 CO デザインセンター 教授)
- 日時: 2016年7月22日(金) 14:30~16:00
- 場所: 大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ2階 セミナー室D
- 主催: 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2016年7月22日(金)に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ2階 セミナー室Dにて、第19回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会(STiPS Handai 研究会)「Roles of universities in promoting local communities' engagement with science in France and Japan」を開催しました。教職員計10人(ゲストなども含む)が参加しました。今回のゲストは、Davy Lorans さん(リヨン大学)。Lorans さんは、リヨン大学サイエンスショップにコーディネーターとして関わっている方です。

司会進行の平川教授より今回の研究会の趣旨説明があった後、Lorans さんから、リヨン大学のサイエンスショップについてご紹介いただきました。具体的には、サイエンスショップで扱っている各プロジェクトの立ち上げから研究成果のフィードバックに至るプロセス、プロジェクトに関わる学生などに提供するトレーニングプログラムについて、お話がありました。続いて、2人の指定討論者からは、日本の大学の現状や、日本で試行されたサイエンスショップの課題についての話題提供がありました。



その後は、参加者が輪になって意見交換を行いました。フランスと日本の大学やサイエンスショップについて。またそれに対する研究者やコーディネーターの関わり方について。大学が果たすべき社会的責任について。現状の問題点や運営の難しさ等について。このような様々なトピックについて、フランス及び日本側の双方からの視点から検討しあった有意義な研究会となりました。

第 20 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル: Global issues and science policy: What role for science diplomacy?
- ゲスト: Mr. Paul Harris (Counsellor (Education and Science), The Australian Embassy Tokyo/ Visiting Fellow, Crawford School of Public Policy, The Australian National University)
- 日時: 2016 年 10 月 28 日 (金) 14:40~16:20
- 場所: 大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催: 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2016 年 10 月 28 日 (金) に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A にて、第 20 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会) 「Global issues and science policy: What role for science diplomacy?」を開催しました (大学院生対象の授業「科学技術と公共政策」の一環として開催)。今回のゲストは、Paul Harris 氏。Harris さんは、駐日オーストラリア大使館の参事官として、主に教育・科学における分野での業務に従事されている方です。授業の受講生 8 人 (大学院生 8 人) が参加しました。

司会進行の工藤助教より今回の研究会の趣旨説明、国際問題やそれにかかる科学技術外交の概要説明後、Harris さんから、オーストラリア大使館での業務内容やなぜ科学技術外交が必要なのか、またオーストラリアがどのように日本や諸外国との外交に力を入れているかについてお話をいただきました。具体的には、科学技術外交とはどのようなものか、なぜ今オーストラリアが科学技術外交に力をいれて取り組んでいるのか、また、日本やアメリカ等の諸外国との研究助成の違い、相互の連携をもつことによる利点等についての情報提供がありました。

質疑応答の時間では参加した学生からの質問に合わせて、積極的な意見が交わされました。オーストラリアと日本の研究者に対する研究助成の考え方の違いや、オーストラリア独自の視点、また、科学技術外交における今後の課題等について検討しあった有意義な研究会となりました。



第 21 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：Science in Society: Recent Trends and Future Challenges
- ゲスト：Dr. Massimiano Bucchi (Professor of Science in Society, Università di Trento)
- 日時：2016 年 11 月 2 日 (火) 16:20～17:50
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロン
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)

2016 年 11 月 2 日 (火) に、大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1 階 交流サロンにて、第 21 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)「Science in Society: Recent Trends and Future Challenges」を開催しました (大学院生対象の授業「科学技術とコミュニケーション」の一環として開催)。

今回のゲストは、Massimiano Bucchi 教授。Bucchi 先生は、イタリアのトレント大学の教授で、ヨーロッパで活躍されている科学技術コミュニケーション分野の第一人者です。「Public Understanding of Science」という学術雑誌の編集長も務めています。21 人 (授業の受講生 7 人、外部聴講 5 人、大阪大学教職員 9 人) が参加しました。

まずは、授業「科学技術とコミュニケーション」の担当教員の平川秀幸教授より、科学技術コミュニケーションの歴史や国際的な流れについて簡単な説明がありました。その後、Bucchi 先生から、科学技術コミュニケーションに関する論文などの年代別、国別の出版数のデータを示しながら、科学技術コミュニケーションの捉え方や在り方の変遷についてご紹介いただきました。そして、現在の風潮や今後取り組むべき課題等についてお話を頂きました。

質疑応答の時間には、ヨーロッパと諸外国との違いについて、過去と現在とで活用されるメディアや手法の違いについて、など、様々な観点の話題が出ていました。



第 22 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：文部科学省における政策立案・政策形成
- ゲスト：斉藤 卓也（文部科学省 研究振興局 基礎研究振興課 基礎研究推進室長）
- 日時：2016 年 11 月 18 日（金）14:40～16:10
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2016 年 11 月 18 日（金）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントコモンズ 2 階 セミナー室 A にて、第 22 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「文部科学省における政策立案・政策形成」を開催しました（大学院生対象の授業「科学技術と公共政策」の一環として開催）。この研究会には、17 人（授業の受講生 7 人、外部聴講 5 人、大阪大学教職員 5 人）が参加しました。

今回は、ゲストに文部科学省の斉藤卓也さんをお迎えしての研究会でした。斉藤さんは、「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』」推進事業の立ち上げに携わった方です。これからの大学や研究環境の在り方を考えながら、日々お仕事をされています。

まずは、今まで携わってこられた事業や現在担当されている業務についての紹介がありました。その後、日本の国力（経済力・国際競争力・エネルギー自給率等）の現状や推移を諸外国のデータと比較しながら分かりやすくご説明いただきました。これらの状況を理解したうえで、今後、日本がどのような未来を選択すべきなのか、大学および研究環境の改革や人材育成はどうあるべきか、といった課題について、政策担当者の目線からお話いただきました。

斉藤さんご自身が政策立案の現場において肌で感じていらっしゃることも交えながらのお話は、参加者の心に響くものがあって、終了予定時間が過ぎても、質問が途切れませんでした。



第23回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：日本の医療分野における研究開発～ゲノム研究・医療に関する政策を中心に～
- ゲスト：三成 寿作（大阪大学大学院医学系研究科 医の倫理と公共政策学分野 助教）
- 日時：2016年11月25日（金）14:40～16:10
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2階 セミナー室A
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2016年11月25日（金）に、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2階 セミナー室Aにて、第23回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「日本の医療分野における研究開発～ゲノム研究・医療に関する政策を中心に～」を開催しました（大学院生対象の授業「科学技術と公共政策」の一環として開催）。

今回は、ゲストに大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理と公共政策学分野 助教の三成寿作さんをお招きしました。この研究会には、12人（授業の受講生9人、大阪大学教職員3人）が参加しました。

ゲノム研究・医療における研究開発の推進には、内閣官房を筆頭に、文部科学省や経済産業省、そして厚生労働省をはじめとする複数の省・法人等が連携して取り組んでいます。三成さんのお話は、まず、研究推進のための基盤となる法律である、健康・医療戦略推進法についての紹介から始まりました。続いて、同法の下で実施された複数の施策を整理・俯瞰した後、国立研究開発法人 日本医療研究開発機構（AMED）のお話に移っていきます。三成さんは、AMEDに2015年春から1年間出向されていたこともあり、非常に具体的かつ臨場感のあるお話を聞かせて下さいました。そして、出向時に主に手がけられたゲノム研究・医療に関するプログラムマネジメントについて、丁寧に解説して頂きました。法律から政策、予算配分、そして研究開発・支援機関での業務など、ゲノム研究・医療推進のための仕組みに関する包括的でスケールの大きなお話をとても分かりやすく説明して頂きました。他国との政策的状況の比較について、また、日本特有の課題について、参加者と意見交換も行われました。あっという間の90分でした。



第24回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：企業のビジネスやデザイナーの創作を支える意匠行政
- ゲスト：田中 寛人（特許庁審査第一部意匠課 課長補佐）
- 日時：2017年1月12日（木）18:30～20:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 1階 セミナー室D
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

2017年1月12日（木）、大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 スチューデントcommons 2階 セミナー室Dにて、第24回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）「企業のビジネスやデザイナーの創作を支える意匠行政」を開催しました。

今回は、ゲストに特許庁審査第一部意匠課 課長補佐である田中寛人さんにお越しいただきました。この日集まった参加者は、7人（学生3人、大阪大学教職員4人）。参加者同士の自己紹介からスタートしました。どんな興味関心を持ってこの場に集まってきたのかがわかったところで、ゲストのお話が始まりました。

田中さんは、修士課程までを京都大学大学院工学研究科で過ごし、その後、大阪大学大学院基礎工学研究科で博士課程を、そして、助手を4年ほど勤めた後、大学を辞めて、特許庁に入庁、という珍しいキャリアパスの持ち主です。現役学生にとっては、今、どんなお仕事をされているのか、どういう経緯で特許庁のお仕事をするようになったのか、などが気になるということで、お話の冒頭から質問がたくさん飛び出していました。

意匠の出願から登録までの流れについて、意匠審査の仕組みについて、など、意匠制度に関する概略をご紹介いただきました。「時代の流れに合わせて制度も変えていかなければならない」「企業から意匠行政へのニーズをすくいあげることも大事」というお話も印象に残りました。



❖ 共催：学術政策セミナー

研究者、事務系職員、URA 業務に関心のある方を対象に企画された「学術政策セミナー」（主催：大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室）を STiPS が共催しました。

【共催イベント】第4回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：経営を支えるマネジメント人材とは
- 講演者：五藤 勝三（関西大学 常任理事・法人本部長）、山田 智彦（ダイキン工業（株）人事本部 人事企画グループ長）
- 日時：2016年9月9日（金）13:30～15:30
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 1F 交流サロン
- 主催：大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

大学の価値向上のためには、大学の研究・教育を支える教員が重要であることと同様に、大学の経営を支える事務職員が重要であるといえます。平成27年6月に文部科学省が策定した「国立大学経営力戦略」においても、国立大学の自己改革を進め、新陳代謝を図るための取組として、「経営を担う人材、経営を支える人材の育成確保」が言及されており、大学運営における「経営」的知見が求められつつあります。このような観点からも、今後は事務職員に対する期待はますます大きくなります。

また、日本の民間企業においては人材の流動性が以前より高まりつつあり、外からの人材導入が増えているとはいえ、「人事は経営者からのメッセージ」といわれるように、企業の経営方針を反映した内部人材の育成施策が実施されています。

このような背景から、本学術政策セミナーでは「経営を支えるマネジメント人材とは」と題して議論を行います。このために、私立大学及び民間企業から有識者をお招きし、各組織が必要とする経営を支えるマネジメント人材についてお話いただきます。また、講演後に行うパネルディスカッションでは、講師に加えて本学の事務職員も登壇し、セミナーの参加者との討論を通じて経営を支えるマネジメント人材像について考えたいと思います。

なお、本セミナーは大阪大学職員の研修の一環として開催をしておりますが、学内外でご関心を持つ方々に広くご参加いただけます。（告知文より）

学術政策セミナー -大学のこれからを考える-
第4回「経営を支えるマネジメント人材とは」

2016年9月9日（金）13時30分-15時30分
大阪大学 吹田キャンパス テクノアライアンス棟1F 交流サロン
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2番8号

大学の価値向上のためには、大学の研究・教育を支える教員が重要であることと同様に、大学の経営を支える事務職員が重要であるといえます。平成27年6月に文部科学省が策定した「国立大学経営力戦略」においても、国立大学の自己改革を進め、新陳代謝を図るための取組として、「経営を担う人材、経営を支える人材の育成確保」が言及されており、大学運営における「経営」的知見が求められつつあります。このような観点からも、今後は事務職員に対する期待はますます大きくなります。

また、日本の民間企業においては人材の流動性が以前より高まりつつあり、外からの人材導入が増えているとはいえ、「人事は経営者からのメッセージ」といわれるように、企業の経営方針を反映した内部人材の育成施策が実施されています。

このような背景から、本学術政策セミナーでは「経営を支えるマネジメント人材とは」と題して議論を行います。このために、私立大学及び民間企業から有識者をお招きし、各組織が必要とする経営を支えるマネジメント人材についてお話いただきます。また、講演後に行うパネルディスカッションでは、講師に加えて本学の事務職員も登壇し、セミナーの参加者との討論を通じて経営を支えるマネジメント人材像について考えたいと思います。

なお、本セミナーは大阪大学職員の研修の一環として開催をしておりますが、学内外でご関心を持つ方々に広くご参加いただけます。

プログラム：
・講演1：40分（質疑約10分を含む）
講師：五藤 勝三氏（関西大学 常任理事 法人本部長）
・講演2：40分（質疑約10分を含む）
講師：山田 智彦氏（ダイキン工業（株）人事本部 人事企画グループ長）
・パネルディスカッション：40分
パネラー：講演者、大阪大学事務職員等

参加申込：
大阪大学教職員研修で参加の場合、参加費の集約票提出にご協力ください
上記以外の場合、<http://osaka-u.ac.jp> からお申し込みください
定員になり次第、受付を終了します。

お問い合わせ：
経営企画オフィスURAプロジェクト（担当：高野、稲島）
メール：seminar@kmp.osaka-u.ac.jp
主催：大阪大学経営企画オフィスURAプロジェクト
共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

大阪大学 **世界適塾**   

【共催イベント】第5回学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

- タイトル：大学の研究力の測定と可視化
- 講演者：小泉 周（自然科学研究機構 研究力強化推進本部 特任教授）、阪 彩香（大阪大学経営企画オフィス）、菊田 隆（大阪大学経営企画オフィス）
- 日時：2016年11月25日（金）14:00～16:00
- 場所：大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟1階 アライアンスホール
- 主催：大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

大学の価値向上のためには、大学の研究・教育・社会貢献等の現状を把握し、適切な施策を講じ続ける必要があります。民間企業であれば、売上高や株式時価総額等ステークホルダーの動きを反映した客観的な指標がありますが、大学の場合は定まった指標が存在せず、各大学が独自の指標を用いたり、格付け会社が発表する大学ランキングを参考にしているのが現状と思われます。

創立100周年（2031年）に世界屈指の研究型総合大学になることを目指している大阪大学では研究に関する指標は特に重要であり、市中に存在する指標を参考にしつつも、大学の経営に資する指標の導入を行う必要があります。

このような背景から、本学術政策セミナーでは「大学の研究力の測定と可視化」と題して議論を行います。このために、大学の研究力に関する第一人者である自然科学研究機構の小泉先生をお招きし、大学の研究力を表す指標に関する最新の動向をお話し頂きます。加えて、学内有識者より、大学の研究力を把握するための指標に基づく国内の大学のポジショニングや大阪大学での研究力分析について講演を行います。

その後、講演者と参加者との間で討論を行うことにより、参加者一人ひとりが大学の研究力について改めて考える場としたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁の皆様にもご参加いただけます。

また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。（告知文より）

学術政策セミナー -大学のこれからを考える-
第5回「大学の研究力の測定と可視化」

2016年11月25日（金）14時00分～16時00分
 大阪大学 吹田キャンパス テクノアライアンス棟1F アライアンスホール
 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2番8号

大学の価値向上のためには、大学の研究・教育・社会貢献等の現状を把握し、適切な施策を講じ続ける必要があります。民間企業であれば、売上高や株式時価総額等ステークホルダーの動きを反映した客観的な指標がありますが、大学の場合は定まった指標が存在せず、各大学が独自の指標を用いたり、格付け会社が発表する大学ランキングを参考にしているのが現状と思われます。

創立100周年（2031年）に世界屈指の研究型総合大学になることを目指している大阪大学では研究に関する指標は特に重要であり、市中に存在する指標を参考にしつつも、大学の経営に資する指標の導入を行う必要があります。

このような背景から、本学術政策セミナーでは「大学の研究力の測定と可視化」と題して議論を行います。このために、大学の研究力に関する第一人者である自然科学研究機構の小泉先生をお招きし、大学の研究力を表す指標に関する最新の動向をお話し頂きます。加えて、学内有識者より、大学の研究力を把握するための指標に基づく国内の大学のポジショニングや大阪大学での研究力分析について講演を行います。

その後、講演者と参加者との間で討論を行うことにより、参加者一人ひとりが大学の研究力について改めて考える場としたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁の皆様にもご参加いただけます。

また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。

プログラム

- ・講演1：45分（質疑約10分を含む）
 講師：小泉 周氏（自然科学研究機構 研究力強化推進本部 特任教授）
- ・講演2：25分（質疑約5分を含む）
 講師：阪 彩香氏（大阪大学 経営企画オフィス）
- ・講演3：25分（質疑約5分を含む）
 講師：菊田 隆氏（大阪大学 経営企画オフィス）
- ・総合討論：15分

参加申込

大阪大学職員研修で参加の場合：事務局の事務指図にご確認ください。
 上記以外の場合：www.stips.or.jp からお申し込みください。
 定員になり次第、受付を截止します。

お問合せ

経営企画オフィスURAプロジェクト（担当：奥野、稲島）
 メール：ura@stips.or.jp

主催：大阪大学経営企画オフィスURAプロジェクト
 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

大阪大学 世界通塾
 OSAKA UNIVERSITY World Takujuku




【共催イベント】第6 学術政策セミナー -大学のこれからを考える-

○タイトル：IR の深化と IR との共創

○講演者：浅野 茂（山形大学 学術研究院 教授）、野口 義文（立命館大学 研究部事務部長 産学官連携戦略本部 副本部長）

○日時：2017 年 2 月 23 日（木）14:00～16:00

○場所：大阪大学吹田キャンパス 最先端医療イノベーションセンター棟 3 階 演習室 1, 2

○主催：大阪大学経営企画オフィス URA プロジェクト

○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

大学が社会から高く評価され、社会から支えられるためには、教育研究を通じて社会に貢献しなければなりません。そのために、財源の多くを税金に依存している国立大学は、大学の方針や活動内容を社会の方々によく知って頂き、フィードバックを得て、活かしていく必要があります。

民間企業はお客様や投資家に、サービスや事業内容をよりよく知って頂くために PR(Public relations) や IR(Investor Relations)を行っています。また私立大学でも同様に、そのステークホルダーの理解を得る活動を行っています。今後、国立大学においても、PR や IR により積極的に取組む必要があるのではないのでしょうか。

また、近年、日本の大学において、IR(Institutional Research)が活発に行われるようになりました。この IR は「己を知ること」とも解釈でき、現状を正しく理解した上で、大学の経営戦略に関する立案、実行、検証をするために不可欠です。今後、PR(Public relations)や IR(Investor Relations)に取組む為にも、ますます重要になってきます。

このような背景から、今回の学術政策セミナーでは「IR(Institutional Research)の深化と IR(Investor Relations)との共創」と題して議論を行います。このために、前者の IR に関する第一人者である山形大学の浅野先生をお招きし、最新の動向をお話し頂きます。そして、私立大学で PR や後者の IR に関連した活動を通して大学の発展に尽力されておられる立命館大学の野口様に、その効果についてお話し頂きます。

その後、全体討論を行うことにより、参加者一人ひとりが「IR の深化と IR との共創」に関して理解を深める場としたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。（告知文より）

学術政策セミナー -大学のこれからを考える-
第6回「IRの深化とIRとの共創」

2017年2月23日(木) 14時00分-16時00分
大阪大学 吹田キャンパス 最先端医療イノベーションセンター棟3F 演習室1, 2
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2番8号

大学が社会から高く評価され、社会から支えられるためには、教育研究を通じて社会に貢献しなければなりません。そのために、財源の多くを税金に依存している国立大学は、大学の方針や活動内容を社会の方々によく知って頂き、フィードバックを得て、活かしていく必要があります。

民間企業はお客様や投資家に、サービスや事業内容をよりよく知って頂くためにPR(Public relations)やIR(Investor Relations)を行っています。また私立大学でも同様に、そのステークホルダーの理解を得る活動を行っています。今後、国立大学においても、PRやIRにより積極的に取組む必要があるのではないのでしょうか。

また、近年、日本の大学において、IR(Institutional Research)が活発に行われるようになりました。このIRは「己を知ること」とも解釈でき、現状を正しく理解した上で、大学の経営戦略に関する立案、実行、検証をするために不可欠です。今後、PR(Public relations)やIR(Investor Relations)に取組む為にも、ますます重要になってきます。

このような背景から、今回の学術政策セミナーでは「IR(Institutional Research)の深化とIR(Investor Relations)との共創」と題して議論を行います。このために、前者のIRに関する第一人者である山形大学の浅野先生をお招きし、最新の動向をお話し頂きます。そして、私立大学でPRや後者のIRに関連した活動を通して大学の発展に尽力されておられる立命館大学の野口様に、その効果についてお話し頂きます。

その後、全体討論を行うことにより、参加者一人ひとりが「IRの深化とIRとの共創」に関して理解を深める場としたいと思います。

本セミナーは大阪大学の教職員を対象として企画しておりますが、他大学や官公庁の皆様にもご参加いただけます。また、大阪大学職員研修としてもご参加いただけます。

プログラム:
・講演: 45分間(質疑応答5分を含む)
 講師: 浅野 茂氏(山形大学 学術研究院 教授)
・講演: 45分間(質疑応答5分を含む)
 講師: 野口 義文氏(立命館大学 産学官連携研究部事務部長 戦略本部副本部長)
・全体討論: 15分間

参加費:
大阪大学職員研修で参加の場合、参加費の事務負担にご配慮ください。
上記以外の場合は、<http://ura.osaka-u.ac.jp> からお申し込みください。
定員に達した際、受付を終了します。

申込方法:
申込先: 経営企画オフィスURAプロジェクト(担当: 浅野 義文)
メール: seminar@kaiji.osaka-u.ac.jp

主催: 大阪大学経営企画オフィスURAプロジェクト
共催: 公共圏における科学技術・教育研究拠点(STiPS)

大阪大学 **世界適塾** **World Takijuku**

参加申込URL



その他

【共催イベント】文学部哲学・思想文化学専修 新入生歓迎企画 アラン=マルク・リュ氏講演会

- タイトル：The Power of Thought（思想の力/思考の権力）
- ゲスト：アラン=マルク・リュ（Alain Marc-Rieu）（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 招へい教授／リヨン第三大学名誉教授）
- 日時：2016年4月14日（木）15:00～
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ1階 カルチエ・ミュルチラング
- 言語：英語
- 主催：大阪大学 文学部哲学・思想文化学専修
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

哲学/思想の現代的意義はどこにあるのか？ 思想はいかなる力をもつのか、もちうるのか。思想は社会とどう関わるのか。思想の力とはなにか。

文系不要論が跋扈するいま、「思想の力」をテーマに、大阪大学招聘教授としてフランスから来日中の哲学者アラン=マルク・リュ氏による講演会を開催します。（告知文より）

【共催イベント】第2回「哲学対話実践の社会接続の可能性？」

- タイトル：哲学対話実践の社会接続の可能性？
- 日時：2016年6月11日（土）13:50～18:30
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ2階 セミナー室A
- 共催：科研費「被災地における『哲学的対話実践』の理論的基礎付けと展開」、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

プログラム：

- | | |
|-------------|--|
| 13:30 | 開場 |
| 13:50 | 趣旨説明 西村高宏（福井大学医学部 准教授）、近田真美子（東北福祉大学 講師） |
| 14:00-15:00 | 八木絵香（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 准教授）
『対話』を社会的意決定につなげることは可能なのか |
| 15:00-15:30 | コメント 中岡成文（元 大阪大学大学院文学研究科 教授） |
| 15:30-15:45 | 休憩 |
| 15:45-16:45 | 堀江剛（大阪大学大学院文学研究科 教授）
「組織における『対話』の位置づけ」 |
| 16:45-17:15 | コメント 服部俊子（大阪市立大学大学院看護学研究科 准教授） |
| 17:15-17:30 | 休憩 |
| 17:30-18:30 | 全体討論 |

【共催イベント】公開セミナー「原子力表象をめぐって」

- タイトル：原子力表象をめぐって
- ゲスト：中尾 麻伊香（立命館大学 専門研究員）
- 日時：2016 年 8 月 8 日（月）14:00～17:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング
- 主催：大阪大学 文学部哲学・思想文化学専修
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 企画：哲学・思想文化学専修 中村ゼミ

I 部（14:00～15:30）では、合評会を行いました。

戦前の日本社会に出現した「原子力ユートピア」とはどのようなものだったのか。日本人の核に対する意識に迫った『核の誘惑 戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現』の合評会を、著者の中尾麻伊香さんを迎えて実施しました。

II 部（15:40～17:00）では、上映会を行いました。

中尾さんの監督によるドキュメンタリー映画『よみがえる京大サイクロトロン』の上映会を実施しました。

【共催イベント】公開セミナー「SDI 構想と対峙した専門家たち—Computers in Battle を読む」

- タイトル：SDI 構想と対峙した専門家たち—Computers in Battle を読む
- ゲスト：喜多 千草（関西大学 総合情報学部 教授）
- 日時：2017 年 2 月 24 日（金）10:30～12:00
- 場所：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構 ステューデントコモンズ 1 階 カルチエ・ミュルチラング
- 主催：大阪大学 文学部哲学・思想文化学専修
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 企画：哲学・思想文化学専修 中村ゼミ

CPSR は、コンピュータ専門家たちがみずからの社会的責任を考えるために立ち上げ、2013 年に解散した NPO である。1980 年代、レーガン大統領の掲げた SDI 構想に対して、同グループは報告書「Computers In Battle —Will They Work?」を発表し、議論の必要性を喚起した。本セミナーでは、その内容を検討するとともに、CPSR が同時代にもったインパクトについて考察する。（告知文より）

【共催イベント】第13回科学コミュニケーション研究会 年次大会

- タイトル：第13回科学コミュニケーション研究会 年次大会「科学コミュニケーションとキャリアパス」
- ゲスト：五十嵐 杏南（京都大学 企画・情報部 広報課 国際広報室）、工藤 充（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）、竹内 慎一（NHKエデュケーショナル教育部 専任部長）、Hejcik Pavel（ヘイチク・パヴェル）（日本科学未来館 科学コミュニケーター）、本田 隆行（科学コミュニケーター）、横山 広美（東京大学大学院理学系研究科 准教授）
- 進行：加納 圭（滋賀大学 教育学部 准教授）、水町 衣里（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）、一方井 祐子（京都大学 物質－細胞統合システム拠点（iCeMS）科学コミュニケーショングループ 特定研究員）
- 日時：2016年9月5日（月）10:00～17:00
- 場所：グランフロント大阪北館タワーC 8階、ナレッジキャピタルカンファレンスルームタワーC RoomC04
- 主催：科学コミュニケーション研究会
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 後援：天文教育普及研究会

2016年9月5日（月）、グランフロント大阪北館タワーC8階、ナレッジキャピタルカンファレンスルームタワーC RoomC04において、第13回科学コミュニケーション研究会 年次大会が開催されました。ゲストや研究会事務局メンバーも含めると42人（うち、大学生/大学院生は15人）が参加しました。今年の年次大会のテーマは、「科学コミュニケーションとキャリアパス」。さまざまなセクターで仕事をしている「科学コミュニケーション」に関わるゲストをお招きし、「どのようなキャリアパスがありうるのか?」、「どういうきっかけでその仕事をするようになったのか?」、「今どのような研究が行われているのか?」といったことをお伺いしました。

この日のゲストは6人でした。講演順に、竹内慎一さん（NHKエデュケーショナル教育部・専任部長）、横山広美さん（東京大学大学院理学系研究科・准教授）、Hejcik Pavel（ヘイチク・パヴェル）さん（日本科学未来館・科学コミュニケーター）、本田隆行さん（科学コミュニケーター）、五十嵐杏南さん（京都大学 企画・情報部 広報課 国際広報室）、工藤充さん（大阪大学 C0 デザインセンター・特任助教）。それぞれ15分から20分程度の講演の後は、司会者や会場の参加者からの質問タイムを長めに設けました。講演以外にも、ゲストを含めた「ランチ交流会」や「スピードネットワーキングワークショップ」など、参加者どうしがネットワークを広げるための仕掛けが用意されていました。

参加した大学院生からは、「学生の身ではなかなか聞けない経歴についての具体的なお話が聞けてよかった」「授業の中でなんとなく聞いていた“科学技術コミュニケーション”が、多様な手段で、多様な人々によってなされていると分かった」といった感想が寄せられました。

【共催イベント】RIHDS セミナー「倫理的側面から今後のヘルスケア研究を考える」

- タイトル：倫理的側面から今後のヘルスケア研究を考える
- 講師：山縣 然太朗（山梨大学大学院総合研究部医学域 教授）、井上 真奈美（東京大学大学院医学系研究科 特任教授）、川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授）
- 日時：2016 年 11 月 8 日（火）15:00～17:25
- 場所：イイノホール（東京都千代田区）
- 定員：140 人
- 主催：一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所
- 共催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット、株式会社日本医療データセンター

2016 年 11 月 8 日（火）に、東京都千代田区イイノホールにて、一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所との共催で「倫理的側面から今後のヘルスケア研究を考える」と題したセミナーを開催しました。医療・ヘルスケア分野におけるリアルワールドデータに対する社会的要請と期待は益々大きくなっている一方で、近年の様々な事件から、データ管理のあり方、組織体制の利益相反等の問題点がクローズアップされてきました。今後のさらなる「大規模データベース時代」を迎える中で、倫理的な側面から研究のあり方をテーマとして、山梨大学 山縣然太朗 教授、東京大学 井上真奈美 特任教授、京都大学 川上浩司 教授による講演とパネルディスカッションが行われました。

RIHDS セミナー開催のご案内

「倫理的側面から今後のヘルスケア研究を考える」

主催：一般社団法人ヘルスケア・データサイエンス研究所
共催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット、株式会社日本医療データセンター

医療・ヘルスケア分野におけるリアルワールドデータに対する社会的要請と期待は益々大きくなっています。一方で、近年の様々な事件から、データ管理のあり方、組織体制の利益相反等の問題点がクローズアップされてきています。今後のさらなる「大規模データベース時代」を迎える中で、倫理的な側面から研究のあり方を重点を置いてセッションを企画しています。ご多用中とは存じますが、どうぞご参加くださいようお願い申し上げます。

開催日 2016年11月8日(火) 15:00～17:15(開場14:30)

会場 イイノホール 4階ルームA (東京都千代田区内幸町2丁目1-1)

講演内容

講演1：山縣然太朗先生
(山梨大学大学院総合研究部医学域社会医学講座 教授)
「医学系研究の倫理指針におけるデータベース研究の位置づけ」
2015年4月から施行されている「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」ではバイオバンクやデータアーカイブ/探索者を研究者として位置付け、倫理審査を求めている。
また、2017年秋から施行予定の改正個人情報保護法では配慮を要する情報に「医療」が含まれ、オプトアウトの同意が求められる。これらを踏まえて、データベース研究の現状と課題を概説する。

講演2：井上真奈美 先生
(東京大学大学院医学系研究科 健康と人間の安全保障(AHA)寄附講座 特任教授)
「医学系雑誌査読者・編集者の立場からみた倫理について」
近年、多くの論文がデジタル化され、Web上から簡単に参照できるという利便性の反面に、その一方で、結果のねつ造や記述の虚偽などの不正が明るみに出るようになる。研究者としては、自己防衛のためにも、より一層倫理の徹底が必要となっている。ここでは、これまで査読者・編集者としていくつかの経験談を基に、これから研究者として、査読者としての役割を担うべき、査読者の役割や査読者の責任を概説する。また査読者としての役割を担うべき、査読者の役割を概説する。

講演3：川上浩司 先生
(京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 医病学分野 教授)
「データベース研究の基盤整備と実施の立場から」
データベース研究の発展のためには、医療現場や自治体などから、研究・医療情報を収集しデータベースを構築する基盤整備と、実際に個別の研究課題において研究を実施する際の倫理的な手続きが発生します。これらについて、自身の経験をお話しします。

パネルディスカッション
座長：中山健夫先生(京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康情報学分野 教授)
パネリスト：山縣然太朗先生、井上真奈美先生、川上浩司先生

RIHDS
Research Institute of
Healthcare Data Science
ヘルスケア・データサイエンス研究所

【主催イベント】京都大学/大阪大学 STiPS・東京大学 STIG 連携セミナー

- タイトル：京都大学/大阪大学 STiPS・東京大学 STIG 連携セミナー「医学分野の産学連携での研究活動におけるリスクマネジメント～最前線で活躍する研究者を支える仕組みとするために～」
- 講師：仙石 慎太郎（東京工業大学 准教授）、早乙女 周子（京都大学大学院医学研究科 特定教授）、飯田 香緒里（東京医科歯科大学 産学連携研究センター長・教授）
- 日時：2016 年 12 月 16 日（金）11:00～14:45
- 場所：京都大学 国際科学イノベーション棟 会議室
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、東京大学 科学技術イノベーション政策における政策のための科学教育・研究ユニット（STIG）

2016 年 12 月 16 日（金）に、京都大学国際科学イノベーション棟会議室 5 にて、京都大学/大阪大学 STiPS と東京大学 STIG の連携によるセミナーを開催しました。今回は、「医学分野の産学連携での研究活動におけるリスクマネジメント～最前線で活躍する研究者を支える仕組みとするために～」と題して、3 人の先生による講義とラウンドテーブルトークが行われました。

講義では、東京工業大学 仙石慎太郎 准教授、京都大学 早乙女周子 特定教授、東京医科歯科大学 飯田香緒里 教授らから、バイオ・ヘルスケア分野、創薬研究、産学連携におけるリスクマネジメントについて話題提起が行われました。ラウンドテーブルトークでは、東京大学 城山英明 教授をモデレータとして、産学連携での研究活動におけるリスク、現状の研究マネジメントの課題、あるべき研究マネジメント像などをテーマとした議論が参加者も交えて行われました。

参加申込みはメールにて
所属・氏名を明記してください
STIG@pp.u-tokyo.ac.jp

京都大学/大阪大学STiPS・東京大学STIG連携セミナー
**医学分野の産学連携
研究活動におけるリスクマネジメント**
最前線で活躍する研究者を支える仕組みとするために

2016年12月16日（金）11:00-14:45
京都大学吉田キャンパス 国際科学イノベーション棟 5階 会議室5a,5b

産学連携で行う研究活動については、利益相反、および、知的所有権・データの取り扱いが問題となっています。これらの取扱いに伴うリスクのマネジメントが重要な一方で、研究者の研究時間が年々減少しているなか、マネジメントの負担の軽減も研究力の強化に欠かせないものとなっていると考えられます。
大学がイノベーションのプラットフォームとして機能するために、どのようなリスクを受け入れ、どのようなリスクを避けていくべきなのか、本セミナーでは、最前線で活躍する研究者が感じる研究上のリスクとそれに対する理想的なマネジメント像と、大学の研究マネジメント実態が異なる理想的なマネジメント像、そして、リスクマネジメントの研究から見た理想的なマネジメント像を基に、研究活動を推進する観点で望ましいリスクマネジメントのあり方を議論いたします。

【プログラム】
11:00 第1部
開会挨拶 京都大学大学院医学研究科 川上浩司 教授
11:15 第1講
仙石 慎太郎 准教授
バイオヘルスケア分野での産学連携研究における
研究マネジメント(飯田)
12:15 第2講
早乙女 周子 特定教授
組織的産学連携の創薬研究におけるマネジメント:
アステラスとの連携事例から
13:15 第3部
東京医科歯科大学 産学連携研究センター長
飯田 香緒里 教授
産学連携のリスクマネジメントの必要性
～COEマネジメントを中心に～(東京医科歯科大学の取組)
ラウンドテーブルトーク
ホスト: 産学連携での研究活動におけるリスク/現状の
研究マネジメントの課題、あるべき研究マネジメント像
(モデレータ: 東京大学公共政策大学院 城山 英明 教授)
14:45 閉会

【対象者】
医学研究分野において産学連携を行う研究者/研究マネジメントに
携わる大学実務家(利益相反担当者、産学連携担当者、UR等)/
大学・部局執行部(産学連携推進部)に携わる研究者、
政策担当者

【会場マップ】
京都大学吉田キャンパス 国際科学イノベーション棟 会議室5a,5b

主催 STiPS 大阪大学・京都大学・東京大学 共同主催 STIG 東京大学 科学技術イノベーション政策における政策のための科学教育・研究ユニット STIG@pp.u-tokyo.ac.jp

5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施

5. 拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）の実施

2016 年度から、個別政策課題解決を目指した、拠点間連携プロジェクト（個別政策課題プロジェクト）が実施されることになりました。本拠点 STiPS は、大阪大学メンバーを中心としたプロジェクトと京都大学メンバーを中心としたプロジェクト、それぞれを進めてきました。ここでは、それぞれの取り組みをご紹介します。

阪大拠点プロジェクト

プロジェクト名

新しい科学技術の社会的課題検討のための政策立案支援システムの構築

Developing a Support System for Addressing the Social Impacts of Emerging STI

プロジェクト実施機関

代表拠点：大阪大学

参画拠点：政策研究大学院大学、東京大学、京都大学、九州大学

プロジェクト期間

2016（H28）年 4 月～2019（H31）年 3 月

2016 年度プロジェクトメンバー

- ・平川 秀幸（大阪大学 C0 デザインセンター 教授） *研究代表者
- ・八木 絵香（大阪大学 C0 デザインセンター 准教授）
- ・渡邊 浩崇（大阪大学 C0 デザインセンター 特任講師）
- ・工藤 充（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- ・水町 衣里（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- ・菅原 裕輝（大阪大学 C0 デザインセンター 特任研究員）
- ・小山田 耕二（京都大学学術情報メディアセンター 教授）
- ・小林 俊哉（九州大学科学技術イノベーション政策教育研究センター 准教授）
- ・岸本 充生（東京大学公共政策大学院／政策ビジョン研究センター 特任教授）

プロジェクト概要

新しい科学技術の普及は、恩恵とともに様々な問題も社会にもたらします。研究開発の成果が円滑に社会に受容され、便益が最大化されるためには、対処すべき問題や実現されるべき価値・ニーズなどの社会的課題を研究開発の早い段階から漸次的に特定・検討し、政策立案や制度設計、研究プログラムの策定に効果的に反映することが望まれています。そこで本プロジェクトでは、新規科学技術の社会的課題が政策立案等での確に検討・反映されるのを促進する「社会的課題検討のための政策立案支援システム（ツール）」を構築することを目指します。

具体的な内容

- (1) 政策立案支援システム設計に資する過去事例の集積・分析
 - ・過去の科学技術の社会的課題について、課題の特定・抽出および課題の対応に向けた方法論に関する国内外事例の先行研究についての文献調査。
- (2) 政策立案支援システムに対する現場ニーズの特定
 - ・現在、研究開発が進行中の新しい科学技術（特に超スマート社会に関連した科学技術）に関する政策現場および研究現場における社会的課題検討のニーズを探索。
- (3) 政策立案支援システムの基本設計の検討
 - ・超スマート社会に関連した科学技術に関する市民の期待・懸念について、グループインタビューを通じた探索的な調査（2017年1月21日、22日実施）。
 - ・政策立案支援システムの基本設計の構築。
 - ・連携拠点、政策リエゾン、関連省庁の政策担当者、研究者、有識者を対象としたワークショップを通じた、政策立案支援システムの基本設計案に対する評価及び改善・再設計案の検討（2017年1月24日 SciREX オープンフォーラム・企画セッション）。

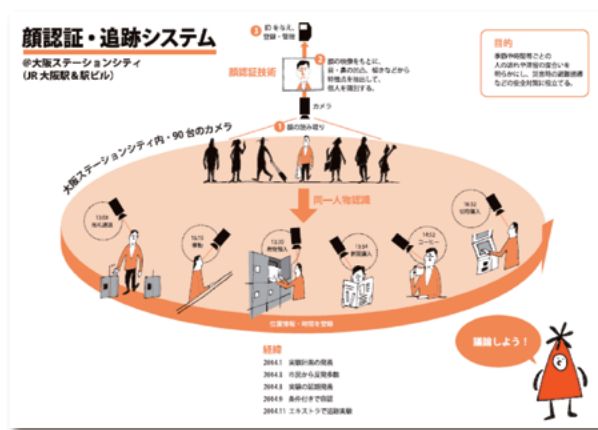


図 グループインタビューで用いた情報提供資料

2016 年度の主たる研究成果

2016 年 10 月から現在まで、本プロジェクトの研究代表者である平川教授を中心に、文部科学省の人材政策課や科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会の研究開発計画に係る連携検討作業部会に対して、科学技術の研究開発・イノベーションにおいて重要な ELSI の観点を提供してきました。

2017 年 1 月 24 日、SciREX オープンフォーラム・企画セッション「萌芽的科学技術の社会的課題検討のあり方を考える：政策立案者の視点から」というワークショップを開催、ビッグデータ・AI・個人認証などの「パーソナルデータの利活用」に関する科学技術を中心に、ELSI とその対応策について議論、成果の取りまとめを行いました。

2017年2月19日、本プロジェクトの菅原特任研究員が、AAAS Annual Meeting 2017 (General Poster Session) にて、日本国内において実施され倫理的・法的・社会的問題が複雑に絡み合って、マスコミや

SNS などに取り上げられた研究事例の紹介や、本プロジェクトで開発を進めている政策立案支援システム（ツール）についての情報共有および意見交換を行いました。

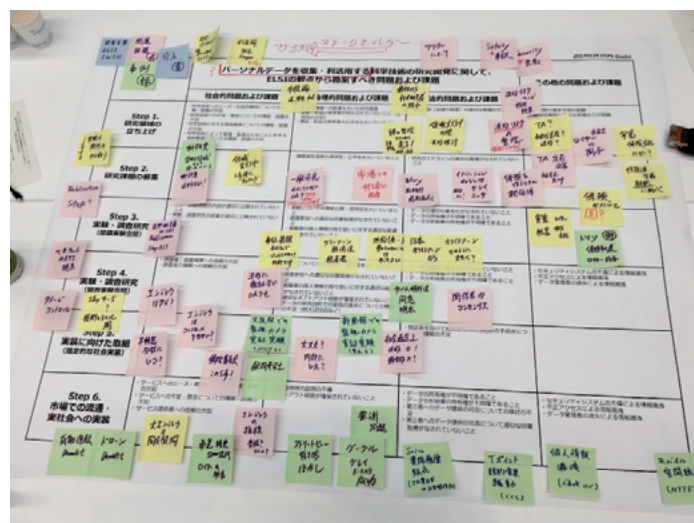


図 開発中の政策立案支援システム（ツール）を基に、政策実務者とその改善や活用法を議論（SciREX オープンフォーラムにて）

成果に係る発表及び報道

1) AAAS 2017 Annual Meeting において、本プロジェクトに関する研究発表（ポスター発表）を行いました。

Sugawara Y, Kudo M, Yagi E, Watanabe H, Mizumachi E, Hirakawa H. 2017. “A Support Tool for Addressing the ELSI of Emerging Science and Technology in Japan”, AAAS 2017 Annual Meeting (Hynes Convention Center, Boston, USA), 2017 年 2 月 19 日. ポスター発表.

京大拠点プロジェクト

プロジェクト名

自治体の持つ学校健診情報の可視化とその利用に向けての基盤構築

Visualizing the Health Information Held by Local Governments for the Policy Development

Considering Associated Ethical and Regulatory Issues

プロジェクト実施機関

代表拠点：京都大学

参画拠点：政策研究大学院大学、東京大学、大阪大学

プロジェクト期間

2016（H28）年4月～2019（H31）年3月

2016年度プロジェクトメンバー

- ・川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授）*研究代表者
- ・森田 朗（政策研究大学院大学 客員教授／SciREX センターPM, 国立社会保障問題研究 前所長／津田塾大学総合政策学部 教授）
- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授）
- ・柴山 創太郎（Lund University, School of Economics and Management Senior Lecturer）
- ・吉田 都美（京都大学大学院医学研究科 特定助教）
- ・井出 和希（京都大学学際融合教育研究推進センター／京都大学大学院医学研究科 特定助教）

プロジェクト概要

ライフコースデータの構築に向けた学校健診情報のデータベース化とそれに伴う倫理的・法的・社会的問題（Ethical, Legal and Social Implications：ELSI）へのアプローチにより市民・社会との相互理解を形成し、健康情報の利活用に向けた基盤を構築することを目的としています。

学校健診情報の電子化及び収集・活用することのできる基盤が形成され、ライフコースデータの構築やデータを活用した持続可能な健康・医療政策への第一歩となることが期待されます。小児期のBMIなどの健康状態は成人期の疾患リスクの予測につながることも報告されており、将来的な疾患の予防を通して健康水準の向上に寄与するだけでなく、成果は健康・医療政策の立案における重要な基礎資料として活用可能であるという意義があると考えています。

具体的な内容

- (1) ライフコースデータの構築に向けた健康情報のデータベース化
- (2) 自治体の持つ学校健診情報の可視化
- (3) 市民・社会との相互理解形成のため ELSI へのアプローチ

2016 年度の主たる研究成果

(1) ライフコースデータの構築に向けた健康情報のデータベース化

約 50 の自治体の書面承諾を得て、独自開発のソフトを用いたデータベース化を開始しました。現在、33 都道府県 76 自治体と調整し、2017 年 1 月時点で 50 自治体と取組を開始しています（図 1）。

データベース化については、方法に従い一次・二次利用に対応できるよう手順を確立し、進めています（図 2）。



図 1. 全国の連携自治体（赤点）

データ取得から二次利用データ化までの流れ

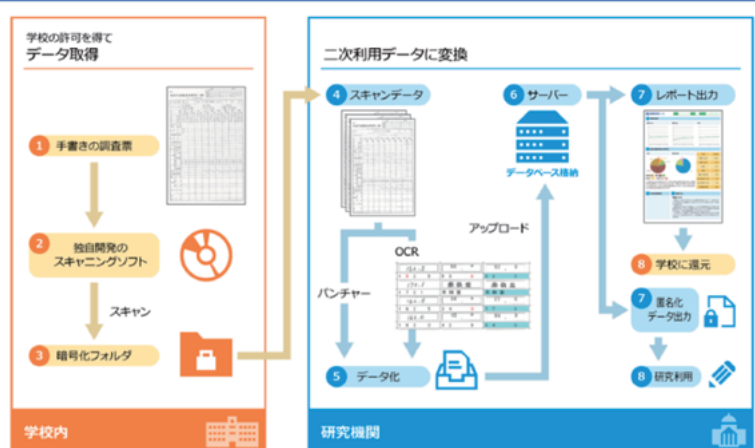


図 2. データベース化の手順

(2) 自治体の持つ学校健診情報の可視化

生徒個人の健康レポート及び自治体向けの集計レポートを作成しました。作成後は、参加自治体の学校を介して生徒個人に無償で還元し、併せて、自治体担当者を介して集計レポートを還元しました（図 3 及び図 4）



図 3. 個人向け健康レポート

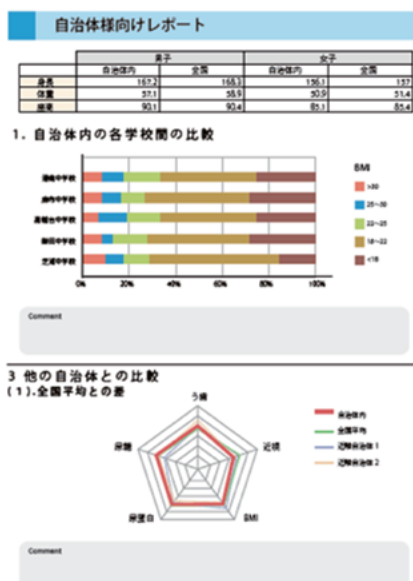


図 4. 自治体向け集計レポート

(3) 市民・社会との相互理解形成のため ELSI へのアプローチ

参加 1 自治体の保護者及び一般市民を対象とした本事業に対する理解や認識の調査を遂行し、80%の保護者の子供の健康への関心が向上し、情報を接続した解析についても一定の理解が得られていることを探索的に確認しました。

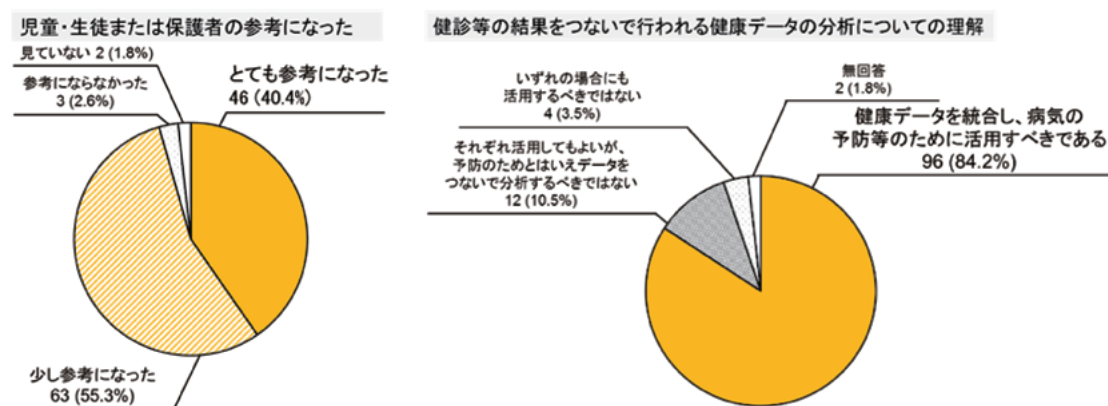


図 5. アンケート調査の結果（一部抜粋）

成果に係る発表及び報道

- 1) 2016 年 6 月に本プロジェクトにおける学校健診情報の可視化とその利用について伊勢志摩サミット準備会議において重要案件として事業概要を発表しました。
- 2) 2017 年 1 月に本プロジェクトにおける学校健診情報のデータベース化と保護者アンケートについて第 1 回科学技術イノベーション政策のための科学オープンフォーラムにおいて発表を行いました。
- 3) その他、読売新聞（2016 年 11 月 21 日）、信濃毎日新聞（2016 年 10 月 15 日）で、学校健診の匿名化データベース構築と重要性についての記事が掲載されました。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

❖ ナレッジキャピタル超学校シリーズ

「ナレッジキャピタル超学校」は、大学や企業、研究機関などの様々な分野の研究者と一般参加者が一緒に考え、対話するプログラムです。2016年度は、大阪大学 C0 デザインセンターとナレッジキャピタルとが共同で開催するナレッジキャピタル超学校シリーズ「対話で創るこれからの『大学』」全8回を開催しました。その中の4回は、STiPS が共催しました。



以下、「対話で創るこれからの『大学』」シリーズの案内文です。

この夏、大阪大学に「C0 デザインセンター」が誕生しました。

大学の中だけで閉じない。

社会の中の多様な人々と一緒に「知」の意味を捉え直したい。

その上で、人をつなぎ、知識をつなぎながら、何かを創出する人材を育成したい。

そんな新しい大学のあり方を目指すべく、誕生した教育研究拠点です。

今回のシリーズでは、特に大学の重要なミッションのひとつである「教育」に焦点をあてます。分断した「知」をつなぎ、社会に実装する力「高度汎用力」とは何か？ その力はどのように培われていくのか？ということについて、みなさんと一緒に、考えてみたいと思います。

また、本講座は、第1部（1回目～4回目）と第2部（5回目～8回目）の全8講座を予定しております。

第1部では、「C0 デザインセンターの教員×社会の中で新しい価値をつくり出している実践者」の対談を予定しています。「高度汎用力」教育のより具体的な姿について考えます。

第2部では、私たちが考える「高度汎用力」が社会で展開されている具体例、つまり、「社会の中で異なる分野・立場が持つ知恵や経験を〃つなぐ〃お仕事をされている方」をお招きする予定です。

ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第5回

- タイトル：一步先の未来を描くために-異分野の視点や知を集める-
- 講師（対談する人）：江間 有沙（東京大学教養学部附属科学技術インタープリター養成部門 特任講師）
水野 祐（弁護士／シティライツ法律事務所 代表）
- コーディネーター（聞き手）：水町 衣里（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- 日時：2017 年 2 月 2 日（木）19:00～20:30
- 場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）
- 定員：50 人
- 主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 C0 デザインセンター
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」、シリーズ第5回となる「一步先の未来を描くために：異分野の視点や知を集める」を、2017 年 2 月 2 日（木）、グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階にあるカフェラボにて開催しました。

C0 デザインセンターの超学校シリーズは全 8 回。ここからいよいよ後半に突入します。第 5 回以降は、これまでと少し趣向を変えて「社会の中で異なる分野・立場が持つ知恵や経験を“つなぐ”お仕事をされている方」をお招きしてトークを展開します。

今回の講師は、人工知能学会の倫理委員会の委員を務めるなどテクノロジーと社会の関係について日々考えている江間有沙さんと、クリエイターのための無料法律相談組織「Arts and Law」や Creative Commons Japan の理事も務める法律家 水野祐さんです。寒さが厳しい中、37 人のみなさまにご参加いただきました。

江間さんと水野さんはこの日が初対面。にもかかわらず、あっという間に打ち解けて、楽しく対談がスタートしました。お二人とも、おもしろいかも！という直感に従って「どんどん突っ込んでいく」のだそう。「フットワーク軽い」や「興味本位でウロウロ動く」という言葉がしばしば登場していました。“異分野をつなぐ人”の特徴がここにあるのかもしれません。

江間さんの「異なる分野の研究者みんな、よい問いを探すということをしている」というエピソードや、水野さんの「自分の中にある“ビジョン”に従って、弁護士としての仕事をしている」という言葉は、多くの人の印象に残ったようです。

新しい技術やアートが、世の中に根づくためには、何を整えるべきか、どういう人と人をつなぐべきか、ということを真剣に考えて、そして、楽しく動いているお二人でした。



ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第6回

○タイトル：アイディアをかたちにして-人類進化ベッドはこうしてできた-

○講師（対談する人）：石川 新一（東南西北デザイン研究所 代表 / 環境デザイナー）、座馬 耕一郎（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）、岩田 有史（株式会社イワタ 代表取締役 / 快眠研究家）

○コーディネーター（聞き手）：水町 衣里（大阪大学 CO デザインセンター 特任助教）

○日時：2017 年 2 月 17 日（金）19:00～20:30

○場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）

○定員：50 人

○主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター

○共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」、シリーズ第6回となる「アイディアをかたちにして：人類進化ベッドはこうしてできた」を、2017 年 2 月 17 日（金）、グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階にあるカフェラボにて開催しました。金曜日の夜ということで梅田には大勢の人が行き交う中、43 人のみなさまにご参加いただきました。



今回は、野生のチンパンジーの寝床をヒントにうまれた「人類進化ベッド」開発チームをお招きしました。環境デザイナーとして活躍されている石川新一さん、チンパンジー研究者の座馬耕一郎さん、寝具開発のプロフェッショナルである岩田有史さんです。

この3人が最初に出会ったのは、2015 年 5 月に開催された研究会。座馬さんが、毎日樹上にベッドをつくって寝るという習性を持っているチンパンジーに関する研究発表をした回で、石川さんと岩田さんも参加していました。チンパンジーのベッドに寝てみたことがある座馬さんの「ものすごく気持ちがいいんです!」、「こんなベッドが欲しい!」という熱い思いをなんとか形にすべく始まった「人類進化ベッド」開発プロジェクトだそうです。

座馬さんだけが持つ感覚を頼りに開発を進めるには、「寝心地の良さ」を手探りで見つけなければなりません。それぞれが持つ専門性を総動員して、分業するのではなく「みんながデザイナーであり、研究者であり、経営者である」という視点で、考え、悩み、進んできたのだそうです。常にそれぞれから刺激を受けていたと3人は口にします。知らないことに触れる楽しさ、それぞれが持ち寄る知恵に触れる楽しさ、そして課題を乗り越える楽しさ... そんな“未知との遭遇”を楽しむ姿がとても印象的でした。

ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第7回

- タイトル：現場の枠を飛び越える：実践と政策のつなぎ方
- 講師（対談する人）：相川 高信（自然エネルギー財団 上級研究員）、吉澤 剛（大阪大学大学院医学系研究科 准教授）
- コーディネーター（聞き手）：水町 衣里（大阪大学 C0 デザインセンター 特任助教）
- 日時：2017 年 3 月 1 日（水）19:00～20:30
- 場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）
- 定員：50 人
- 主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 C0 デザインセンター
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル：対話で創るこれからの「大学」。

シリーズ第7回の「現場の枠を飛び越える：実践と政策のつなぎ方」は、2017 年 3 月 1 日（水）、グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階にあるカフェラボにて開催しました。36 人のみなさまにご参加いただきました。

この日お招きしたのは、相川高信さんと吉澤剛さんです。

研究と実践、現場と政策... という切り離せないけれど、その間に立ってコミュニケーションをとることはなかなか難しい、そんな間を「つなぐ」お仕事をされているお二人でした。

楽しくて異分野をつなぐ、というよりは、その現場に関わっているうちにいつのまにか感じてしまっている責任を果たすために仕事をしている。後世への責任感から仕事をしている。というお話が印象的でした。

参加者の方からは、「色んな立場になって考える、現地に足を運んで地に足のついた議論をする、相手の話に耳を傾けながらつながりを広げていらっしゃるということが印象的でした」というようなコメントをいただきました。



ナレッジキャピタル超学校 対話で創るこれからの「大学」第8回

- タイトル：つながりを研究するー「つなぐ人」がもたらす価値ー
- 講師（対談する人）：内田 由紀子（京都大学こころの未来研究センター 准教授）、神里 達博（千葉大学国際教養学部 教授 / 大阪大学 CO デザインセンター 客員教授 / 朝日新聞 客員論説委員）
- コーディネーター（聞き手）：水町 衣里（大阪大学 CO デザインセンター 特任助教）
- 日時：2017 年 3 月 16 日（木）19:00～20:30
- 場所：カフェラボ（グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階）
- 定員：50 人
- 主催：一般社団法人ナレッジキャピタル、株式会社 KMO、大阪大学 CO デザインセンター
- 共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル:対話で創るこれからの「大学」。

最終回の「つながりを研究する：『つなぐ人』がもたらす価値」を、2017 年 3 月 16 日（木）、グランフロント大阪北館 ナレッジキャピタル 1 階にあるカフェラボにて開催しました。44 人のみなさまにご参加いただきました。

第 5 回以降は、「社会の中で異なる分野・立場が持つ知恵や経験を“つなぐ”お仕事をされている方」をお招きしてきました。

最終回となる今回は「つなぐ人」に関心を持ち続けてきた研究者お二人をお招きしました。

文化心理学・社会心理学の観点から、人のつながりについて研究をされている内田由紀子さんと、科学史や科学技術社会論が専門で、新聞や書籍などで社会と科学・技術の関係について様々な論筆をされている神里達博さんです。

つなぐ人たちが活躍する世界を俯瞰することを目指した第 8 回でした。

複雑でタコつぼ化した社会をどう乗り越えたらいいのか。メディアについて、大学での取り組みについて、多様なものの見方ができるような人を育てるということについて・・・いろいろな側面から話が進みました。

その中の 1 つ、印象に残っているのは、「出口（アウトプット、論文や本）よりも入口（インプット、テーマやキーワード）の共有が大事なのでは？」というエピソードでした。評価されるのは出口、ということもあって、つつい出口を揃えることにこだわりたいけれど、一番柔軟な段階で多様な観点からのアイディアを共有することも大事にしたい、というお話でした。



京大拠点主催：政策のための科学イベント

中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会

- タイトル：中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会
- 日時：2017 年 3 月 22 日（水）18:00～19:00
- 場所：京都大学医学部 G 棟 3 階 335 演習室
- 主催：京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット

前年度に引き続き、2017 年 3 月 22 日（水）に京都大学医学部 G 棟 3 階 335 演習室にて、中央省庁からの関西への出向行政官による政策のための科学勉強会を実施しました。中央省庁から関西へ出向している行政官と京都大学政策のための科学ユニットから 9 人が参加し、交流が行われました。議論の中で、中央省庁へ就職する人を増やすための方策や、各省庁の政策課題に沿った研究テーマ選択等について議論が行われ、今後の連携強化を図っていくことになりました。

勉強会参加者は、講義の提供を通して、学生との交流を図っていくことが提案され、同時に、今年度講義を経験された先生から学生の積極性が評価できると意見がありました。また、政策における市民生活の位置付けや、科学技術の社会実装について意見交換されました。

7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2016 年度には、以下の活動を行うことができました。

I) 「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation; RRI)」に関する国際的ネットワーク機関 (VIRI) への加盟について

近年の EU の科学技術イノベーション政策の柱の一つである「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に代表されるように、先進諸国では、科学技術の発展が社会に適切に埋め込まれるために必要な多様なアクターの相互作用のあり方に関する研究の進展が重視されています。こうした問題意識のもと、米国アリゾナ州立大学が「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation (VIRI)」を構築しました。2014 年 6 月、本拠点 STiPS は、審査の上、同国際ネットワーク VIRI に正式に加盟が認められました。2017 年 9 月現在、欧州、アジア、南米、中東などの世界各地から 24 拠点が VIRI に加盟していますが、日本からは本拠点 STiPS のみが加盟しています (<https://cns.asu.edu/viri/partners>)。

II) 責任ある研究・イノベーション教育・研究推進のための EU コンソーシアム「Higher Education Institutions & Responsible Research and Innovation; HEIRRI」との連携

EU の Horizon 2020 プログラムの助成を受け「責任ある研究・イノベーション (RRI)」の高等教育機関での推進に取り組むコンソーシアムである「Higher Education Institutions & Responsible Research and Innovation; HEIRRI」と、継続的な情報共有・意見交換を行っていくことについて合意しました。

海外調査及び発表等

2016 年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

2016 年 6 月

平川秀幸（大阪大学 教授）が、イギリス・ロンドンで行われた国際会議 15th Annual Science and Democracy Network Annual Meeting に参加し、意見交換と情報収集を行いました。

2016 年 8 月末から 9 月初旬

小林傳司（大阪大学 理事・副学長）、平川秀幸（大阪大学 教授）、八木絵香（大阪大学 准教授）は、スペインバルセロナの 4S/EASST Conference Barcelona 2016 において、科学技術政策における最新の研究に関する情報収集を行いました。

平川秀幸（大阪大学 教授）は、Case Studies for Responsible Innovation: Lessons from Fukushima をテーマとしたセッションの中で、“Politics in Risk Discourse on Radioactive Risks in Japan” と題した発表を行いました。

2016 年 10 月中旬（19～23 日）

神里達博（大阪大学 客員教授）が、ウィーンで開催された EPTA Conference 2016 に参加し、意見交換を行いました。

2016 年 11 月

工藤充（大阪大学 特任助教）が、ニュージーランド・ダニーデンで開かれた Towards Engaged Research: A Workshop において“Promotion of 'science communication' over the last two decades in Japan” と題した研究発表を行い、意見交換を行いました。

2016 年 11 月

平川秀幸（大阪大学 教授）が、中国・北京で開かれた East Asian STS Network Conference に参加し、意見交換を行いました。

2017 年 2 月（14～25 日）

渡邊浩崇（大阪大学 特任講師）が、宇宙政策や科学技術哲学に関する教育・研究の打合せ及び資料・情報収集を目的として、ロシアのモスクワで、スコルコボ・イノベーションセンター、宇宙飛行士記念博物館を訪問し、サンクトペテルブルグでは、ロシア科学アカデミー応用天文学研究所、サンクトペテルブルグ国立大学及び航空宇宙機器国立大学を訪問した。加えて、ドイツのケルンでは、ドイツ航空宇宙センター（DLR）を訪問しました。

2017 年 2 月中旬

菅原裕輝（大阪大学 特任研究員）が、アメリカ・ボストンで開かれた AAAS Annual Meeting 2017 において、大阪大学拠点で進めている拠点間連携プロジェクトの成果をポスター発表のなかで報告し、意見交換を行いました。

2017 年 2 月

工藤充（大阪大学 特任助教）が、オーストラリア・アデレードで開かれた The Australian Science Communicators National Conference 2017 において、“Potentials, limitations and the future direction of postgraduate education and training in science communication” と題した研究発表を行い、意見交換を行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2016 年度の STiPS 参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子 30 ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

- 小林傳司. 2016. 「もっと前から学んでおくべきだったこと：3.11 福島原発事故の後で」, 『科学不信の時代を問う—福島原発災害後の科学と社会（編：島菌進、後藤弘子、杉田敦）』, 8-29 頁, 2016 年 5 月. 書籍
- 小林傳司. 2016. 「3.11 と第四期科学技術基本計画の見直し（特集 福島原発事故に対する省察）」, 『科学技術社会論研究』, 12, 125-138 頁, 2016 年 5 月. 学術論文
- 小林傳司. 2016. 「科学技術を『賢く』使いこなせる 22 世紀に」, 『小日本』, 26, 2016 年 6 月. 寄稿
- 平川秀幸. 2016. 「3・11 後の科学と民主主義：『子ども・被災者支援法』をめぐる混乱から考える（特集 科学論の挑戦）」, 『アステイオン』, 85, 76-93 頁, 2016 年 11 月. 寄稿論文
- 平川秀幸. 2017. 「科学／技術への民主的参加の条件」, 『岩波講座 現代 第 2 巻 ポスト冷戦時代の科学／技術（編：中島秀人）』, 119-144 頁, 2017 年 2 月. 著書
- 平川秀幸. 2017. 「子ども・被災者支援法の「意義」を掘り起こす：リスクガバナンスのデュープロセスともう一つの権利侵害（特集 社会のリスクと企業利益）」, 『科学』, 87(3), 263-270 頁, 2017 年 3 月. 寄稿論文
- 平川秀幸. 2017. 「公共的問題としての科学技術（第 13 章）」, 『改訂版 公共哲学（編著：山岡龍一、齋藤純一）』, 224-241 頁, 2017 年 3 月. 著書
- 平川秀幸. 2017. 「科学技術の公共的問題にどう取り組むか — 民主性と専門性の対立を超えて（第 14 章）」, 『改訂版 公共哲学（編著：山岡龍一、齋藤純一）』, 242-260 頁, 2017 年 3 月. 著書
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 過剰なバッシング この国のもろさの兆候」, 『朝日新聞』, 4 月 15 日, 朝刊, 2016 年 4 月. 寄稿
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 未来のリスク 「都合の悪いこと」を語ろう」, 『朝日新聞』, 5 月 20 日, 朝刊, 2016 年 5 月. 寄稿
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 「ゆとり世代批判」に異議 足りないのは変える「勇気」」, 『朝日新聞』, 6 月 17 日, 朝刊, 2016 年 6 月. 寄稿
- 神里達博, 寿楽浩太. 2016. 「福島原発事故に対する省察：特集にあたって（特集 福島原発事故に対する省察）」, 『科学技術社会論研究』, 12, 9-11 頁, 2016 年 5 月. 学術論文
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 自動運転車の未来 望ましい社会、まず描こう」, 『朝日新聞』, 7 月 15 日, 朝刊, 2016 年 7 月. 寄稿

- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 相模原事件から考える 「同じ船」 の意識あるか」, 『朝日新聞』, 8 月 19 日, 朝刊, 2016 年 8 月. 寄稿
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 映画「シン・ゴジラ」 日本の宿命へのアイロニー」, 『朝日新聞』, 9 月 16 日, 朝刊, 2016 年 9 月. 寄稿
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 「もんじゅ」と「豊洲市場」 民主主義と専門主義の相克」, 『朝日新聞』, 10 月 21 日, 朝刊, 2016 年 10 月. 寄稿
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) トランプ氏勝利の意味 新時代に向き合う覚悟を」, 『朝日新聞』, 11 月 18 日, 朝刊, 2016 年 11 月. 寄稿
- 神里達博. 2016. 「(月刊安心新聞) 高齢ドライバーの事故 統計と報道イメージに差」, 『朝日新聞』, 12 月 16 日, 朝刊, 2016 年 12 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 新時代の教育改革 一発勝負より過程重視を」, 『朝日新聞』, 1 月 20 日, 朝刊, 2017 年 1 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 広がる「ポスト真実」 事実の軽視、まるで中世」, 『朝日新聞』, 2 月 17 日, 朝刊, 2017 年 2 月. 寄稿
- 神里達博. 2017. 「日本型リスク社会」, 『岩波講座 現代 第 2 巻 ポスト冷戦時代の科学／技術 (編: 中島秀人)』, 145-174 頁, 2017 年 2 月. 著書
- 神里達博. 2017. 「(月刊安心新聞) 糸魚川・アスクルの教訓 「火の地震」 都市は備えを」, 『朝日新聞』, 3 月 17 日, 朝刊, 2017 年 3 月.
- 八木絵香. 2016. 「ただ『加害者』の傍らにあるということ: 福島第一原子力発電所事故と JR 福知山線 事故 2 つの事故の経験から (特集 福島原発事故に対する省察)」, 『科学技術社会論研究』, 12, 106-113 頁, 2016 年 5 月. 学術論文
- 辻田俊哉. 2017. 「中東の安全保障構造—都市化の傾向とレジリエンスの視点をふまえて」, 『アジア研究ワールド・トレンド』, 256, 42-43 頁, 2017 年 2 月. 学術論文

学会発表など

- Hirakawa H, Shirabe M. 2016. “Politics in Risk Discourse on Radioactive Risks in Japan (Case Studies for Responsible Innovation: Lessons from Fukushima 内),” 4s/EASST Conference Barcelona 2016 (Barcelona International Convention Centre, Barcelona, Spain), 2016 年 9 月 3 日. 口頭発表.
- Hirakawa H. 2017. “Competing Ways of Framing the Problem of Voluntary Evacuation from Fukushima,” 国際シンポジウム「科学と民主主義、そして専門家の役割」(東京工業大学大 岡山キャンパス), 2017 年 3 月 3 日. 口頭発表.
- 神里達博. 2016. 「科学者の責任、技術者の責任—その歴史的経緯」, 日本トライボロジー学会, トライボロジー会議 2016 春東京・倫理シンポジウム (東京・国立オリンピック記念青少年センター), 2016 年 5 月. 招待講演.
- 神里達博. 2016. 「科学技術の社会的・倫理的側面—“ELSI”登場の背景」—社・電子情報通信学会・バイオメトリクス研究専門委員会, 第 6 回バイオメトリクスと認識・認証シンポジウム (東京・芝浦工業大学), 2016 年 11 月. 基調講演.
- 八木絵香. 2016. 「『“被害者”と“加害者”のあいだにある』という方法」, 第 15 回科学技術社会論学会年次研究大会 (北海道大学), 2016 年 11 月 5 日. 口頭発表.

- 八木絵香, 山内保典. 2016. 「気候変動問題における市民参加の再検討」, 第 15 回科学技術社会論学会年次研究大会 (北海道大学), 2016 年 11 月 6 日. 口頭発表.
- Tsujita, T. 2017. “Social Design in Japan: Trends, Impacts, and Challenges,” VIA Social Innovation Educator Exchange Program, Japan/US Social Innovation and Leadership Panel (DG717, San Francisco, California, USA), 2017 年 2 月 14 日. 招待, 口頭発表.
- Tsujita, T. 2017. “Towards Inclusive and Resilient Development in the Middle East: Trends, Impacts, and Challenges of Urbanization,” International Symposium: Towards Multiculturalism, Coexistence, and Growth in the Middle East (Osaka University, Osaka, Japan). 2017 年 1 月 16 日. 口頭発表.
- 渡邊浩崇. 2016. 「米国の宇宙政策の歴史: 国際競争と協力のバランス」, 第 60 回宇宙科学技術連合講演会 (函館市, 函館アリーナ), 2016 年 9 月 6 日. 口頭発表.
- Kano K, Suga M, Yoshizawa G, Kudo M, Mizumachi E, Goto T, Ebina K. 2016. “Engaging the public in STI policymaking: Using segmentation method as an indicator for science and society,” OECD Bluesky III (Convention Center Het Pand, Ghent, Belgium), 2016 年 9 月 19 日. ポスター発表.
- Yoshizawa G, Suga M, Kudo M, Mizumachi E, Kano K. 2016. “Understanding the plurality of public interests for open strategy in science and innovation,” OECD Bluesky III (Convention Center Het Pand, Ghent, Belgium), 2016 年 9 月 21 日. 口頭発表.
- 田原敬一郎, 白根純人, 工藤充, 八木絵香. 2016. 「社会問題解決のためのエコシステムと研究コミュニティの役割」, 研究・イノベーション学会第 31 回年次学術大会 (青山学院大学青山キャンパス, 東京), 2016 年 11 月 5 日. 口頭発表.
- Kudo, M. 2017. “Potentials, limitations and the future direction of postgraduate education and training in science communication,” The Australian Science Communicators National Conference 2017 (The Science Exchange, Adelaide, Australia), 2017 年 2 月 24 日. 口頭発表.
- 水町衣里, 川上雅弘, 加納圭, 和田濱裕之, 遠山真理. 2016. 「ボードゲーム風幹細胞教育教材『幹細胞研究やってみよう!』の開発」, 日本科学教育学会第 40 回年会 (大分市, ホルトホール大分), 2016 年 8 月 19 日. 口頭発表.
- 塩瀬隆之, 水町衣里, 土井祐磨, 竹内慎一, 加納圭. 2016. 「水族館における『くらべる』課題の実践: カガクノミカタの基盤的スキル」, 日本科学教育学会第 40 回年会 (大分市, ホルトホール大分), 2016 年 8 月 19 日. 口頭発表.
- 加納圭, 水町衣里, 塩瀬隆之, ヘイチク パヴェル, 岡本雅子, 佐々木孝暢, 西田賢仁, 竹内慎一. 2016. 「科学の考え方に注目したアクティブラーニング〜NHK E テレ『考えるカラス』連動ワークショップを例に〜」, 日本科学教育学会第 40 回年会 (大分市, ホルトホール大分), 2016 年 8 月 19 日. 口頭発表.
- Kano K, Mizumachi E, Shiose T, Hecjick P, Okamoto M, Sasaki T, Nishida M, Takeuchi S. 2016. “Science Active Learning: Using a Japanese educational TV Program, ‘Think like a Crow: The Scientific Method’ (Symposium: Fostering the Scientific Mindset 内),” 2016 International Conference of East-Asian Association for Science Education (EASE2016TOKYO) (東京理科大学), 2016 年 8 月 27 日. 口頭発表.
- Mizumachi E, Kawakami M, Kano K, Wadahama H, Toyama M. 2016. “Educational Material for an Introduction to Stem Cell Research (Symposium: Fostering the Scientific Mindset 内),” 2016

International Conference of East-Asian Association for Science Education (EASE2016TOKYO)
(東京理科大学), 2016 年 8 月 27 日. 口頭発表.

Shiose T, Mizumachi E, Doi Y, Takeuchi S, Kano K. 2016. “Practice of Comparison Issues in Aquarium: A Fundamental Skill of the Scientific Mindset (Symposium: Fostering the Scientific Mindset 内),” 2016 International Conference of East-Asian Association for Science Education (EASE2016TOKYO) (東京理科大学), 2016 年 8 月 27 日. 口頭発表.

加納圭, 水町衣里. 2016. 「対話力トレーニングプログラム (フォーラム「3つの科学コミュニケーション研修プログラム (基礎、メディア、対話力)」内)」, 第38回日本分子生物学会年会/第88回日本生化学会大会 合同大会 (横浜市, パシフィコ横浜), 2016 年 11 月 30 日. 口頭発表.

Sugawara Y, Kudo M, Yagi E, Watanabe H, Mizumachi E, Hirakawa H. 2017. “A Support Tool for Addressing the ELSI of Emerging Science and Technology in Japan,” AAAS 2017 Annual Meeting (Hynes Convention Center, Boston, USA), 2017 年 2 月 19 日. ポスター発表.

講演会、展示会などのアウトリーチ活動

STiPS (阪大). 2017. ポスター発表, “「つなぐ人材」を育てるために: 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS) の特色”, 阪大フェスタ セッション C「未来の「問い」を考える」(大阪市, ヒルトン大阪), 2017 年 3 月 23-24 日.

小林傳司. 2016. 発表者, 「STS 的発想とは?」, 第 1 回 SciREX 交流研究会 (政策研究大学院大学), 2016 年 5 月 27 日.

小林傳司. 2016. 講師, 「大阪大学の教育改革トレンドと大学院教育の現状と課題」, 平成 28 年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント (FD) フォーラム: 大阪大学における大学院教育の未来を考える (大阪大学), 2016 年 9 月 12-13 日.

小林傳司. 2016. 講師 (対談者), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 1 回「社会の『公器』としての大学」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 10 月 17 日.

小林傳司. 2016. 講師, 高度教養教育・学生支援機構 連続セミナー2016: これからどうする?—科学技術と社会— 第 2 回「科学・技術と社会: 3.11 以後に考えるべき問題」(仙台市, 東北大学 川内北キャンパス), 2016 年 11 月 4 日.

小林傳司. 2016. 講演, 「社会的合意形成?〜リスクコミュニケーションの在り方〜」, 日本工学会技術倫理協議会第 12 回公開シンポジウム (東京理科大 森戸記念館第 1 フォーラム), 2016 年 11 月 22 日.

小林傳司. 2017. パネラー, シンポジウム「いま科学者の役割を考える 科学コミュニケーションのあり方 (主催: JST 科学コミュニケーションセンター)」(コクヨホール, 東京都港区), 2017 年 3 月 16 日.

小林傳司. 2017. パネリスト, 大阪大学シンポジウム「新たな価値創造のモードと人材育成」第 2 部パネルディスカッション「イノベーションをデザインする人材、ネットワークとは?」(大阪市, ヒルトン大阪), 2017 年 3 月 23 日.

平川秀幸. 2016. 講師, 「公共圏における科学技術・教育研究拠点プログラム」, 平成 28 年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント (FD) フォーラム: 大阪大学における大学院教育の未来を考える (大阪大学), 2016 年 9 月 12 日.

- 平川秀幸. 2016. 基調講演, STI 政策専修コース 科学技術社会論概説特別セミナー (九州大学 箱崎キャンパス), 2016 年 10 月 22 日.
- 平川秀幸. 2016. NHK 特報首都圏「企業と“軍事”～民生技術の活用 どうあるべきか～」, 2016 年 12 月 9 日放送.
- 平川秀幸. 2017. 講師 (対談者), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 4 回「未来を動かす人とテクノロジー」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 1 月 13 日.
- 神里達博. 2016. インタビュー, 「川内原発・運転停止棄却 科学史の専門家『原発再稼働は社会全体で議論を』」, NHK ニュース, 2016 年 4 月 6 日配信.
- 神里達博. 2016. 鼎談, 『明日、機械がヒトになる ルポ最新科学』 (講談社現代新書) 刊行記念イベント: 海猫沢めろん×塚越健司×神里達博「文化系トークラジオ Life トークイベント ヤバイ! 理科系—そろそろシンギュラリティが起きて人類がマジで滅びる 5 秒前」(東京, B&B), 2016 年 5 月 22 日.
- 神里達博. 2016. 招待講演, 『「プロ」の倫理～食品不正の背景を探る～』, 第 21 回・食の安全を考えるつどい「農場から食卓までの食の安全について考える」(大田区消費者生活センター), 2016 年 6 月 4 日.
- 神里達博. 2016. モデレーター, 「情報技術と生命操作技術の拡大による「人類観」の変容」, 公開シンポジウム「フロンティアを目指す、サイエンスとアート」(東京, 日本学術会議), 2016 年 6 月 27 日.
- 神里達博. 2016. パネラー, 「いま、地球で起きていること」, 朝日地球会議 2016 (東京, 帝国ホテル), 2016 年 10 月 3 日.
- 神里達博. 2016. ゲスト, 「ポスト・トゥルースのその先へ」, TBS ラジオ「LIFE」, 2016 年 2 月 26 日放送.
- 神里達博. 2017. 講師 (対談者), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 CO デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 8 回「つながりを研究する:『つなぐ人』がもたらす価値」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 3 月 16 日.
- 神里達博. 2016. インタビュー, 「(耕論) 災害とコミュニケーション 神里達博さん、藤代裕之さん、片山善博さん」, 『朝日新聞』, 2016 年 4 月 22 日 朝刊.
- 神里達博. 2016. 「人類の行く末、学問領域越え議論 人工知能・生命科学…未来探るシンポ開催」, 『朝日新聞』, 2016 年 6 月 30 日 朝刊 27 面.
- 神里達博. 2016. シンポ「フロンティアを目指す、サイエンスとアート」=特集 取材記事, 『読売新聞』, 2016 年 7 月 16 日, 朝刊 13 面
- 神里達博. 2016. インタビュー, 「＜考論＞理解得る説明必要」, 『朝日新聞』, 10 月 1 日, 朝刊 39 面.
- 神里達博. 2017. 新聞記事へのコメント掲載, 「自らの研究、鳥瞰できるか 学術会議の声明案『軍事研究の禁止を継承』」, 『朝日新聞』, 朝刊 35 面, 2017 年 3 月 9 日.
- Tsujita, T. 2017. 招待, “Israel-Japan Leadership Program,” Embassy of Israel in Japan, (Tel Aviv, Israel), 2016 年 9 月 3-9 日.
- 八木絵香. 2016. コーディネーター (パネルディスカッション), 食の安全安心シンポジウム『「輸入食品は危ない」は本当なの? ～食品情報の見極め方～』(大阪市, 大阪府新別館北館), 2016 年 8 月 12 日.

- 八木絵香. 2016. 講師, 平成 28 年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント (FD) フォーラム: 大阪大学における大学院教育の未来を考える「専門外の人に研究内容を伝える能力を教える」(大阪大学), 2016 年 9 月 13 日.
- 八木絵香. 2016. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 1 回「社会の『公器』としての大学」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 10 月 17 日.
- 八木絵香. 2016. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 2 回「『技術』と『不満』のつなぎ方」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 11 月 17 日.
- 八木絵香. 2016. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 3 回「学びが『生まれる場』の作り方」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 12 月 14 日.
- 八木絵香. 2017. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 4 回「未来を動かす人とテクノロジー」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 1 月 13 日.
- 八木絵香. 2017. 司会, 大阪大学シンポジウム「新たな価値創造のモードと人材育成」第 2 部パネルディスカッション「イノベーションをデザインする人材、ネットワークとは?」(大阪市, ヒルトン大阪), 2017 年 3 月 23 日.
- 工藤充, 水町衣里. 2016. 講師, 大阪府立豊中高等学校 SSH 科学コミュニケーション実習 第 2 回「意見の多様性を考える」(豊中市, 豊中高校 SSH), 2016 年 8 月 31 日.
- 工藤充. 2016. 招待講演, 第 13 回科学コミュニケーション研究会「科学コミュニケーションとキャリアパス」内「これまでの転機を振り返る」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 9 月 5 日.
- Kudo M. 2016. 招待講演, “Promotion of ‘science communication’ over the last two decades in Japan,” Towards Engaged Research: A Workshop (Otago Museum, Dunedin, New Zealand), 2016 年 11 月 11 日.
- 水町衣里. 2016. 企画, NHK E テレ「カガクノミカタ」連動ワークショップ in 京野菜レストラン梅小路公園: 京野菜料理の試食, シェフのミニトークもあるよ! (京都市, 京野菜レストラン梅小路公園), 2016 年 6 月 11 日.
- 水町衣里. 2016. 企画, NHK E テレ「カガクノミカタ」連動ワークショップ in 京野菜レストラン梅小路公園: 京野菜料理の試食, シェフのミニトークもあるよ! (京都市, 京野菜レストラン梅小路公園), 2016 年 7 月 30 日.
- 水町衣里. 2016. 講師, Tera school 自由研究祭 2016「後祭」: 中間発表会 (京都市, 東本願寺しんらん交流館), 2016 年 8 月 6 日.
- 水町衣里. 2016. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2016 SUMMER: NHK E テレ『考えるカラス』連動ワークショップ「ここから先をみんなで考えてみる」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 8 月 13 日.
- 水町衣里. 2016. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2016 SUMMER: “超・立体的”協力ボードゲーム「TATEWARI」 ～しっかり遊べ。遊びながら学べ。～ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 8 月 13 日.

- 水町衣里. 2016. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2016 SUMMER : 細胞育成ゲーム「幹細胞研究やってみよう！」～しっかり遊べ。遊びながら学べ。～ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 8 月 14 日.
- 水町衣里. 2016. 進行, 第 13 回科学コミュニケーション研究会「科学コミュニケーションとキャリアパス」内「これまでの転機を振り返る」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 9 月 5 日.
- 水町衣里. 2016. ブース出展, 科学とアートの「想像力」が会合うとき (京都大学アカデミックディ 2016 内) (京都大学), 2016 年 9 月 18 日.
- 水町衣里. 2016. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2016 AUTUMN : NHK E テレ『考えるカラス』連動ワークショップ「ここから先をみんなで考えてみる」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 11 月 12 日.
- 水町衣里. 2016. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2016 AUTUMN : “超・立体的”協力ボードゲーム「TATEWARI」～しっかり遊べ。遊びながら学べ。～ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 11 月 13 日.
- 水町衣里. 2016. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2016 AUTUMN : 細胞育成ゲーム「幹細胞研究やってみよう！」～しっかり遊べ。遊びながら学べ。～ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2016 年 11 月 13 日.
- 水町衣里. 2017. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 5 回「未来を動かす人とテクノロジー」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 2 月 2 日.
- 水町衣里. 2017. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 6 回「アイデアをかたちに: 人類進化ベッドのつくり方」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 2 月 17 日.
- 水町衣里. 2017. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 7 回「現場の枠を飛び越える: 実践と政策のつなぎ方」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 3 月 1 日.
- 水町衣里. 2017. コーディネーター (聞き手), ナレッジキャピタル超学校 大阪大学 C0 デザインセンター×ナレッジキャピタル: 対話で創るこれからの「大学」 第 8 回「つながりを研究する: 『つなぐ人』がもたらす価値」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 3 月 16 日.
- 水町衣里. 2017. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2017SPRING : NHK E テレ『考えるカラス』連動ワークショップ「ここから先をみんなで考えてみる」(大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 3 月 18 日.
- 水町衣里. 2017. 講師, ナレッジキャピタル ワークショップフェス 2017SPRING : NHK E テレ NHK E テレ『カガクノミカタ』連動ワークショップ (大阪市, ナレッジキャピタル), 2017 年 3 月 18 日.
- 水町衣里. 2017. 招待講演, 第 24 回農芸化学 Frontiers シンポジウム内「社会にむけた『科学の伝え方』を考える」(京都市, KKR 京都くに荘), 2017 年 3 月 21 日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Calistus Wilunda, Satomi Yoshida, Marta Blangiardo, Ana Pilar Betran, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2017. “Caesarean delivery and anaemia risk in children in 45 low- and middle- income countries: propensity-score weighting and meta-analysis of national survey data,” *Maternal & Child Nutrition*, in press. 学術論文
- Masahiro Iwasaku, Maki Shinzawa, Shiro Tanaka, Kimihiko Kimachi, and Koji Kawakami. 2017. ” Clinical characteristics of adrenal crisis in adult population with and without predisposing chronic adrenal insufficiency: a retrospective cohort study,” *BMC Endocrine Disorders*, in press. 学術論文
- Lin Song, Satomi Yoshida, Sachiko Tanaka-Mizuno, Yusuke Ogawa, Toshiaki A. Furukawa, and Koji Kawakami. 2017. “Association between eicosapentaenoic acid (EPA) medication intake and new onset of depression among patients with hyperlipidemia: a 3-year follow-up study,” *Journal of Nutrition & Intermediary Metabolism*, in press. 学術論文
- Hongyan Chen, Maki Shinzawa, Hironobu Tokumasu, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2017. “Short sleep and risk of proteinuria in 3-year-olds in Japan: a population-based cohort study,” *Sleep Medicine*, in press. 学術論文
- Fumiko Ono, Shiro Tanaka, Yoko M. Nakao, and Koji Kawakami. 2017. “Utilization of anticoagulant and antiplatelet agents among patients with atrial fibrillation undergoing percutaneous coronary intervention:A retrospective cohort study using a nationwide claims database in Japan,” *Circulation Journal*, in press. 学術論文
- Takuya Kinoshita, Hironobu Tokumasu, Shiro Tanaka, Alex Kramer, and Koji Kawakami. 2017. “Policy implementation for methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* in seven European countries: a comparative analysis from 1999 to 2015,” *Journal of Market Access & Health Policy*, in press. 学術論文
- Masato Takeuchi, Taichi Kawamura, Izumi Sato, and Koji Kawakami. 2017. “Population-based incidence of diabetic ketoacidosis in type 2 diabetes: medical claims data analysis in Japan,” *Pharmacoepidemiology and Drug Safety*, in press. 学術論文
- Yasuyuki Honjo, Ayaki Takashi, Takami Tomiyama, Tomohisa Horibe, Hidefumi Ito, Hiroshi Mori, Ryosuke Takahashi, and Koji Kawakami. 2017. “Decreased levels of PDI and P5 in oligodendrocytes in Alzheimer’s disease,” *Neuropathology*, in press. 学術論文
- Óskar Hálfðánarson, Helga Zoëga, Lise Aagaard, Miquel Bernardo, Lena Brandt, Anna Coma Fusté, Kari Furu, Kristina Garuoliené, Falk Hoffmann, Krista F. Huybrechts, Luuk J. Kalverdijs, Koji Kawakami, Helle Kieler, Takuya Kinoshita, Melisa Litchfield, Soffy C. López, Jorge E. Machado-Alba, Manuel E. Machado-Duquw, Mufaddal Mahesri, Prasad S. Nishtala, Sallie Pearson, Johan Reutfors, Leena K. Saastamoinen, Izumi Sato, Catharina C.M. Schuiling-Veninga, Yu-Chiau Shyu, Svetlana Skurtveit, Hélène Verdoux, Liang-Jen Wang, Corinne Zara Yahni, and Christian

- J. Bachmann. 2017. “Large variety in antipsychotic utilisation in children, adults, and older adults in 16 countries worldwide,” *European Neuropsychopharmacology*, in press. 学術論文
- Takeshi Kimura, Masato Takeuchi, Takumi Imai, Shiro Tanaka, Koji Kawakami, and Neonatal Research Network of Japan. 2017. “Vaginal versus cesarean delivery for neurodevelopment at 3 years in neonates born at <26 weeks of gestation: retrospective analysis of a nationwide registry in Japan,” *Neonatology*, in press. 学術論文
- Shinzo Hiroi, Kentaro Sugano, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2017. “Impact of health insurance coverage for *Helicobacter pylori* gastritis on the trends in eradication therapy in Japan: retrospective observational study and simulation study based on real-world data,” *BMJ Open*, in press. 学術論文
- Yuji Kanazawa, Masato Takeuchi, Ichiro Tateya, Koichi Omori, and Koji Kawakami. 2017. “Clinical epidemiology of tracheal invasion from thyroid cancer in Japanese population study: functional outcomes and impact of aging,” *Cancer Epidemiology*, in press. 学術論文
- Tomohisa Horibe, Nanako Okushima, Aya Torisawa, Ryutaro Akiyoshi, Yoko Hatta-Ohashi, Hirobumi Suzuki, and Koji Kawakami. 2017. “Evaluation of chemical chaperones based on the monitoring of Bip promoter activity and visualization of extracellular vesicles by real time bioluminescence imaging,” *Luminescence*, in press. 学術論文
- Takumi Imai, Shiro Tanaka, Koji Kawakami, Miyazaki T, Hagino H, Shiraki M. for the A-TOP (Adequate Treatment of Osteoporosis) research group. 2017. “Health state utility values and patients reported outcomes before and after vertebral and non-vertebral fractures in an osteoporosis clinical trial.” *Osteoporosis International*, DOI 10.1007/s00198-017-3966-7. 学術論文
- Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2017. “Prescription of antibiotics to pre-school children from 2005 to 2014 in Japan: a retrospective claims database study,” *Journal of Public Health*, in press. 学術論文
- Izumi Sato, Hideki Onishi, Shuhei Yamada, and Koji Kawakami. 2017. “Prevalence and initial prescription of psychotropics in patients with common cancers in Japan, based on a nationwide health insurance claims database,” *Psycho-Oncology*, in press. 学術論文
- Izumi Sato, Kenji Kochi, Chika Nishiyama, Sachiko Tanaka-Mizuno, Yuko Doi, Masaru Arai, Yosuke Fujii, Toshiyuki Matsunaga, Yusuke Ogawa, Toshi A. Furukawa, and Koji Kawakami. 2017. “Trends in antipsychotic prescriptions for Japanese outpatients during 2006-2012: a descriptive epidemiological study,” *Pharmacoepidemiology and Drug Safety*, in press. 学術論文
- Kimiko Kadohara, Izumi Sato, and Koji Kawakami. 2017. “Diabetes mellitus and risk of early-onset Alzheimer’s disease: A population-based case-control study,” *European Journal of Neurology*, in press. 学術論文
- Nanthini Thevi Bhoo Pathy, Shinako Inaida, Shiro Tanaka, Nur Aishah Taib, Cheng Har Yip, Marniza Saad, and Koji Kawakami. 2017. “Impact of adjuvant chemotherapy on survival of women with T1MON0, hormone receptor negative breast cancer,” *Cancer Epidemiology*, in press. 学術論文
- Christian J. Bachmann, Lise Aagaard, Francisco J. de Abajo, Miquel Bernardo, Lena Brandt, Massimo Cartabia, Antonio Clavenna, Anna Coma Fusté, Kari Furu, Kristina Garuoliené, Falk Hoffmann, Samantha Hollingworth, Krista Huybrechts, Luuk J. Kalverdiijk, Koji Kawakami, Helle Kieler,

- Takuya Kinoshita, Soffy C. López, Jorge E. Machado-Alba, Manuel E. Machado-Duque, Mufaddal Mahesri, Dolores Montero, Prasad Nishtala, Daniele Piovani, Johan Reutfors, Leena K. Saastamoinen, Izumi Sato, Catharina C.M. Schuiling-Veninga, Yu-Chiau Shyu, Dan Siskind, Svetlana Skurtveit, Hélène Verdoux, Liang-Jen Wang, Corinne Zara Yahni, Helga Zoëga, and David Taylor. 2017. “International trends in clozapine use: A study in 17 countries, 2005-2014,” *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 136(1), 37-51. 学術論文
- 井出和希, 吉田都美, 尾板靖子, 川上浩司. 2017. 「学校健診データの利活用に関する認識と理解：保護者を対象としたアンケート調査」, 『学校保健研究』, 59(5). 学術論文
- 尾上洋介, 中尾彰宏, 糸直人, 小山田耕二, 川上浩司. 2016. 「学校健康診断情報の有効活用に向けた匿名データベース構築の取り組み」, 『医療情報学』, 36(5), 221-229. 学術論文
- 川上浩司. 2016. 「行政健康資料の可視化とデータベース構築による予防医療にむけて」, 『ファルマシア (日本薬学会雑誌)』, 52 (10), 925-929. 学術論文
- 川上浩司. 2017. 「電子カルテデータ提供開始へ, 大学や製薬会社の研究者に全国 130 の医療機関から収集」, 『薬事日報』, 11845. 寄稿
- 川上浩司. 2017. 「学校健診情報のデータベース化とその利活用」, 『週刊医学界新聞』, 3214. 寄稿
- 川上浩司. 2017. 「医療データが病気の予防や治療を変えるー医療データの活用に向けた様々な取り組み」 『Medical Note』. 寄稿 (インタビュー)
- 川上浩司. 2016. 「学校健診 記録データ化:成人期の病気予防などに活用。」『読売新聞』, 12月11日, 朝刊. 寄稿
- 川上浩司. 2017. 「リアルワールドデータ重視の時代へ 日本薬剤疫学会、観察と介入、評価逆転も」, 『日刊薬業』, 14557. 寄稿
- 川上浩司, 祐野恵. 2016. 「自治体と連携、健康や研究に生かす (地域論壇)」, 『日経グローバル』, 305, 54-57. 寄稿
- 川上浩司. 2017. 「学校健診データベース構築 - 今年度に対象人口 5%カバー」 『薬事日報』
- 川上浩司, 松井信智. 2016. 「埋もれていた健康国家のカギ リアルワールド・データ (RWD) と共に予防医療を変えるライフコースデータ」, 『JB Press』. 寄稿 (特別対談)
- 川上浩司. 2016. 「私のメンター～受け継がれる研究の心～ Raj K Puri 博士」, 『実験医学』, 34(13). 寄稿
- 川上浩司. 2016. 「薬剤疫学の動向とリアルワールドデータ、行政健康情報の統合について」, 『日本疫学会ニュースレター』, 47. 寄稿
- 川上浩司. 2017. 「ライフコース・ヘルスケアの基盤整備のための学校健診情報、母子保健情報のデータベース構築」, 『医薬ジャーナル』. 総説
- 川上浩司. 2017. 「安全性評価から臨床評価、健康福祉社会へと展開するリアルワールドデータと薬剤疫学」, 『大阪医薬品協会会報』, 平成 29 年 4 月第 819 号. 総説
- 川上浩司. 2017. 「医療、社会の変化に対応して、リアルワールドデータが切り拓く新たな薬剤疫学」, 『薬剤疫学』, in press, 2017. 総説
- 川上浩司. 2017. 「医療ビッグデータと薬剤疫学」, 『日本病院薬剤師会雑誌』, 53(1), 23-27
- 祐野恵, 川上浩司. 2016. 「捨てられていた学校健診データを活用：自治体と連携、健康や研究に生かす」, 『日経グローバル』, 305, 54-57. 総説

- 堀部智久, 河野雅之, 瀬戸佳穂里, 阿栄高娃, 川上浩司. 2017. 「ハイブリッドペプチドを用いた新たながん分子標的治療を目指して」, 『生化学』, 89(1), 31-38. 総説
- 川上浩司. 2016. 「メディカルアフェアーズの機能の重要性について (1) 医療データベースの利活用」, 『医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス』, 47(9), 626-629. 総説
- 川上浩司. 2016. 「医療機器の研究開発におけるアカデミアの役割: 医療機器開発に向けて薬事行政: 日米の違いと国際調和」, 『日本医療機器学会雑誌』, 86(5), 473-475. 総説
- 清水公治, 伊藤達也, 岩江荘介, 大守伊織, 倉田真由美, 住谷昌彦, 戸高浩司, 村山 敏典, 山本晴子, 川上浩司. 2016. 「医療機器の研究開発におけるアカデミアの役割: 医療機器を用いた臨床研究実施に関するアンケート調査結果」, 『日本医療機器学会雑誌』, 86(5), 482-488. 総説
- 川上浩司. 2016. 「ビッグデータはどこまで使えるか?」, 『循環器内科』, 79(3), 271-275. 総説
- Matsumoto T, Tabara Y, Murase K, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Muro S, Kadotani H, Kosugi S, Sekine A, Yamada R, Nakayama T, Mishima M, Matsuda F, Chin, K. 2017. “Combined association of clinical and lifestyle factors with non-restorative sleep: The Nagahama Study,” PLoS One. 9;12(3), e0171849. 学術論文
- Hirata A, Hirata T, Takahashi Y, Nakayama T. 2017. “Surveillance rates for hepatocellular carcinoma among patients with cirrhosis, chronic hepatitis B, and chronic hepatitis C based on Japanese claims database,” Hepatol Res. Mar;47(4), 283-292. 学術論文
- Miyamoto K, Iwakuma M, Nakayama T. 2017. “Effect of Genetic Information Regarding Salt-Sensitive Hypertension on the Intent to Maintain a Reduced Salt Diet: Implications for Health Communication in Japan,” J Clin Hypertens (Greenwich) Mar;19(3), 270-279. 学術論文
- Taniguchi F, Koike N, Kikukawa T, Yabuta M, Yamaguchi M, Adachi E, Nakayama T. 2017. “An evaluation of laparoscopic hysterectomy alone versus in combination with laparoscopic myomectomy for patients with uterine fibroids,” Eur J Obstet Gynecol Reprod Biol. Mar;210, 132-138. 学術論文
- Fujimoto S, Kon N, Takasugi J, Nakayama T. 2017. “Attitudes, knowledge and behavior of Japanese physical therapists with regard to evidence-based practice and clinical practice guidelines: a cross-sectional mail survey,” J Phys Ther Sci. Feb;29(2), 198-208. 学術論文
- Ohwada H, Nakayama T, Kanaya Y, Tanaka Y. 2017. “Serum albumin levels and their correlates among individuals with motor disorders at five institutions in Japan,” Nutr Res Pract. Feb;11(1), 57-63. 学術論文
- Tabara Y, Arai H, Hirao Y, Takahashi Y, Setoh K, Kawaguchi T, Kosugi S, Ito Y, Nakayama T, Matsuda F; Nagahama Study Group. 2017. “The causal effects of alcohol on lipoprotein subfraction and triglyceride levels using a Mendelian randomization analysis: The Nagahama study,” Atherosclerosis. Feb;257, 22-28. 学術論文
- Ohtera S, Kanazawa N, Ozasa N, Ueshima K, Nakayama T. 2017. “Proposal of quality indicators for cardiac rehabilitation after acute coronary syndrome in Japan: a modified Delphi method and practice test,” BMJ Open. Jan 27;7(1), e013036. 学術論文
- Kojima M, Nakayama T, Otani T, Hasegawa M, Kawahito Y, Kaneko Y, Kishimoto M, Hirata S, Seto Y, Endo H, Ito H, Kojima T, Nishida K, Matsushita I, Tsutani K, Igarashi A, Kamatani N, Miyasaka N, Yamanaka H. 2017. “Integrating patients’ perceptions into clinical practice guidelines

- for the management of rheumatoid arthritis in Japan,” *Mod Rheumatol*. Jan 25, 1-6. 学術論文
- Kuriyama A, Takahashi N, Nakayama T. 2017. “Reporting of critical care trial abstracts: a comparison before and after the announcement of CONSORT guideline for abstracts,” *Trials*. Jan 21;18(1), 32. 学術論文
- Nishigori T, Okabe H, Tsunoda S, Shinohara H, Obama K, Hosogi H, Hisamori S, Miyazaki K, Nakayama T, Sakai Y. 2017. “Superiority of laparoscopic proximal gastrectomy with hand-sewn esophagogastrostomy over total gastrectomy in improving postoperative body weight loss and quality of life,” *Surg Endosc*. Jan 11. 学術論文
- Malinowska KB, Ikezoe T, Ichihashi N, Arai H, Murase K, Chin K, Kawaguchi T, Tabara Y, Nakayama T, Matsuda F, Tsuboyama T. 2017. “Self-reported quality of sleep is associated with physical strength among community-dwelling young-old adults,” *Geriatr Gerontol Int*. Jan 6. 学術論文
- Miyamoto K, Iwakuma M, Nakayama T. 2017. “Erratum to: Experiences and attitudes of residents regarding a community-based genome cohort study in Japan: a population-based, cross-sectional study,” *BMC Med Genomics*. Jan: 10(1), 6. 学術論文
- Tanaka Y, Kawaguchi M, Noguchi Y, Yoshitani K, Kawamata M, Masui K, Nakayama T, Yamada Y. 2016. “Systematic review of motor evoked potentials monitoring during thoracic and thoracoabdominal aortic aneurysm open repair surgery: a diagnostic meta-analysis,” *J Anesth*. Dec;30(6), 1037-1050. 学術論文
- Tanida S, Fujibayashi S, Otsuki B, Masamoto K, Takahashi Y, Nakayama T, Matsuda S. 2016. “Vertebral Endplate Cyst as a Predictor of Nonunion After Lumbar Interbody Fusion: Comparison of Titanium and Polyetheretherketone Cages,” *Spine (Phila Pa)*, Oct 15;41(20), E1216-E1222. PubMed PMID: 27054449. 学術論文
- Chiba Y, Nakayama T. 2016. “Cultural immersion through international experiences among Japanese nurses: Present status, future intentions, and perceived barriers,” *Jpn J Nurs Sci*. Jul;13(3), 378-90. 学術論文
- Kashihara H, Nakayama T, Hatta T, Takahashi N, Fujita M. 2016. “Evaluating the Quality of Website Information of Private-Practice Clinics Offering Cell Therapies in Japan,” *Interact J Med Res*. May 24;5(2), e15. 学術論文
- Sasaki H, Yonemoto N, Mori R, Nishida T, Kusuda S, Nakayama T. 2016. “Use of the ICU Nurse-Physician Questionnaire (ICU N-P-Q): testing reliability and validity in neonatal intensive care units in Japan,” *BMJ Open*. May 9;6(5), e010105. 学術論文
- Kohno A, Musa G, Nik Farid ND, Abdul Aziz N, Nakayama T, Dahlui M. 2016. “Issues in healthcare services in Malaysia as experienced by Japanese retirees,” *BMC Health Serv Res*. May 5;16, 167. 学術論文
- Kanatani KT, Hamazaki K, Inadera H, Sugimoto N, Shimizu A, Noma H, Onishi K, Takahashi Y, Itazawa T, Egawa M, Sato K, Go T, Ito I, Kurozawa Y, Konishi I, Adachi Y, Nakayama T; Japan Environment & Children’s Study Group. 2016. “Effect of desert dust exposure on allergic symptoms: A natural experiment in Japan,” *Ann Allergy Asthma Immunol*. May;116(5), 425-430. e7. 学術論文

- Dagvadorj A, Ota E, Shahrook S, Baljinnyam Olkhanud P, Takehara K, Hikita N, Bavuusuren B, Mori R, Nakayama T. 2016. “Hospitalization risk factors for children’s lower respiratory tract infection: A population-based, cross-sectional study in Mongolia,” Sci Rep. Apr 19(6), 24615. 学術論文
- Muro S, Tabara Y, Matsumoto H, Setoh K, Kawaguchi T, Takahashi M, Ito I, Ito Y, Murase K, Terao C, Kosugi S, Yamada R, Sekine A, Nakayama T, Chin K, Mishima M, Matsuda F; Nagahama Study Group. 2016. “Relationship Among Chlamydia and Mycoplasma Pneumoniae Seropositivity, IKZF1 Genotype and Chronic Obstructive Pulmonary Disease in A General Japanese Population: The Nagahama Study,” Medicine (Baltimore), Apr;95(15), e3371. 学術論文
- Kimura H, Fujibayashi S, Otsuki B, Takahashi Y, Nakayama T, Matsuda S. 2016. “Effects of Lumbar Stiffness After Lumbar Fusion Surgery on Activities of Daily Living,” Spine (Phila Pa 1976), Apr;41(8), 719-27. 学術論文
- 中山健夫, 篠原幸人 (監修). 2016. 『患者さん・介護する方々と医療従事者をつなぐ脳卒中ガイドライン』, 東京医学社. 著書
- 中山健夫, 津谷喜一郎 (編著). 2016. 『臨床研究と疫学研究のための国際ルール集 PART2』, ライフサイエンス出版, 2016 年 7 月. 著書
- Ikuhiko Nakase, Kosuke Noguchi, Ikuo Fujii, Shiroh Futaki. 2016. “Vectorization of Biomacromolecules into Cells Using Extracellular Vesicles with Enhanced Internalization Induced by Macropinocytosis,” Sci. Rep. 6, 34937. 学術論文
- Ikuhiko Nakase, Natsumi Ueno, Miku Katayama, Kosuke Noguchi, Tomoka Takatani-Nakase, Nahoko Bailey Kobayashi, Tetsuhiko Yoshida, Ikuo Fujii, Shiroh Futaki, 2016 “Receptor Clustering and Activation by Multivalent Interaction through Recognition Peptides Presented on Exosomes,” Chem. Commun., 53(2), 317-320. 学術論文
- 二本史朗. 2017. 「アルギニンに富む膜透過ペプチドの細胞内移行」, 『生化学』, 89(1), 8-14. 学術論文
- 江間有沙, 秋谷直矩, 大澤博隆, 服部宏充, 大家慎也, 市瀬龍太郎, 神崎宣次, 久木田水生, 西條玲奈, 大谷卓史, 宮野公樹, 八代嘉美. 2016. 「運転・育児・防災活動, どこまで機械に任せるか: 多様なステークホルダーへのアンケート調査」, 『情報管理』, 59(5), 322-330. 学術論文
- 宮野公樹. 2016. 『反「大学改革」論』, 株式会社ナカニシヤ出版. 著書
- 宮野公樹. 2016. 「科学論の工学的分析」, 『アステイオン』, 085. 寄稿
- 宮野公樹. 2017. 「いまのアカデミアには「常識」が足りない: 京大の異分野融合請負人・宮野公樹」, 『WIRED』, 2 月 10 日. 寄稿 (インタビュー記事)
- 宮野公樹. 2017. 特集「サイエンスのゆくえ」対談記事: 21 世紀の「学問」論: 宮野公樹×山本貴光, 『WIRED』, 2 月 13 日. 寄稿 (対談記事)
- 伊勢田哲治. 2016. 「フォード・ピント事件をどう教えるべきか」, 『技術倫理研究』, 13, 1-36. 学術論文
- 伊勢田哲治. 2016. 「動物福祉と供養の倫理」, 『関西実験動物研究会会報』, 38, 6-22. 学術論文
- 伊勢田哲治. 2017. 「社会派科学哲学の復権——「ポスト冷戦時代」の科学哲学の進む道の再検討」, 『岩波講座 現代第 2 巻 ポスト冷戦時代の科学／技術 (編: 中島秀人)』, 15-37. 学術論文

- カール・ベッカー. 2016. 「スピリチュアルに生きる意味」, 『楽園』, 超高齢社会特集 64, 7-13. 総説
- カール・ベッカー. 2016. 「ケア現場のこころ学創成」, 『こころの未来』, 15, 24-27. 学術論文
- 谷山洋三, 得丸定子, 奥井一機, 今井洋介, 森田敬史, 御堀ヨセフ, カール・ベッカー, 高橋原, 鈴木岩弓, 「経文聴取による喪失悲嘆ストレスのケア」, 『仏教看護・ビハーラ』, 11, 151-165. 学術論文
- カール・ベッカー他. 2016. 「公衆衛生に仏教の力を～高齢社会迎え役割に期待」, 『週間佛教タイムス』, 2686. 総説
- カール・ベッカー. 2017. 「見えないものを感じ取る力」, 『楽園』 66, 8-13. 総説
- 冲永隆子, カール・ベッカー. 2017. 「終末期に対する早期支援」, 『こころの未来』, 16, 52. 総説
- 赤塚京子, カール・ベッカー. 2017. 「出生をめぐる医療と倫理」, 『こころの未来』, 16, 53. 総説
- 中嶋文子, 赤澤千春, 近藤恵, カール・ベッカー. 2017. 「新人看護師の職場適応への過程－5年目看護師の語りの分析」, 『梶山女学園大学看護学研究』, 9, 1-13. 学術論文
- カール・ベッカー. 2016. 「こころ学を考える」, 『こころ学への挑戦 (編: 吉川左紀子, 河合俊雄)』, 創元社, 129-166/246-266. 著書
- Yosuke Onoue, Nobuyuki Kukimoto, Naohisa Sakamoto, and Koji Koyamada. 2016. “E-Grid: a visual analytics system for evaluation structures,” Journal of Visualization, 19(4), 753-768. 学術論文
- Kozen Umezawa, Yosuke Onoue, Hiroaki Natsukawa, and Koji Koyamada. 2016. “Causal Inference in Time Series Data Using Autoencoder,” In Proceedings of the 2nd Symposium on Visualization in Data Science. 学術論文
- Tomoya Uetsuji, Shinsuke Imai, Yosuke Onoue, Minoru Kamata, Yasuo Ebara, and Koji Koyamada. 2016. “Construction on Visualization System of Flow of Conversation in Counseling,” In Proceedings of the 35th JSST Annual Conference International Conference on Simulation Technology (JSST2016), 364-369. 学術論文
- Yosuke Onoue, Nobuyuki Kukimoto, Naohisa Sakamoto, and Koji Koyamada. 2016. “Minimizing the Number of Edges via Edge Concentration in Dense Layered Graphs,” IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics, 22(6), 1652-1661. 学術論文
- Yosuke Onoue, and Koji Koyamada. 2016. “Web-based Visualization System using OPENDAP for Earth Environmental Data,” Proceedings of the 35th JSST Annual Conference International Conference on Simulation Technology (JSST2016). 学術論文
- 加藤千恵子, 青木滉一郎, 尾上洋介, 上辻智也, 平原裕行, 土田賢省, 渡邊好夫, 田中寛, 宮地英生, 鎌田穰, 江原康生, 小山田耕二. 2016. 「こころの可視化」, 『可視化情報学会誌』, 36(143), 172-176. 総説

学会発表など

- 川上浩司. 2016. 「医療リアルワールドデータの勃興による臨床研究の大転」, Research Planet 研究会 (東京都), 2016 年 5 月 29 日. 口頭発表.
- 川上浩司. 2016. 「医療・健康系リアルワールドデータの整備と臨床研究の動向」, 日本薬学会 医療薬学フォーラム (滋賀県), 2016 年 6 月 26 日. 口頭発表.
- 川上浩司. 2016. 「医療リアルワールドデータ, 健康ライフコースデータと臨床研究」, iHF 心不全フ

- フォーラム（東京都），2016 年 8 月 6 日．口頭発表．
- 川上浩司．2016．「薬剤疫学における医療リアルワールドデータ，健康ライフコースデータ」，PBA 医薬アカデミー（東京都），2016 年 8 月 18 日．口頭発表．
- 川上浩司．2016．“Development of the school health check-up and maternal/infant health check-up database,” 13th DIA JAPAN Annual Meeting（東京都），2016 年 11 月 14 日．口頭発表．
- 川上浩司．2016．「医療，社会の変化に対応して、リアルワールドデータが切り拓く新たな薬剤疫学」，第 22 回日本薬剤疫学会学術総会（京都市），2016 年 11 月 18 日．口頭発表．
- 川上浩司．2016．“Medical Databases in Japan: Real World Data and Life Course Data,” Pharma Delegates（静岡県），2016 年 11 月 25 日．口頭発表．
- 川上浩司．2017．「医療リアルワールドデータによる臨床研究」，リウマチ疾患 EFFORT コンソーシアム（東京都），2017 年 2 月 11 日．口頭発表．
- 中山建夫．2016．「ヘルスケアハッカソン」（東京都・日本橋ライフサイエンスビル），2016 年 6 月 10 日．口頭発表．
- 小山田耕二．2016．「あらゆる分野の因果推論を支援するデータ解析・可視化技術について」，第 44 回可視化シンポジウム（工学院大学新宿キャンパス），2016 年 7 月 19 日．口頭発表．
- 夏川浩明，小山田耕二．2016．「脳磁図による複数皮質領域間結合解析と可視化検討」，第 44 回可視化情報シンポジウム（工学院大学新宿キャンパス），2016 年 7 月 20 日．口頭発表．
- 尾上洋介，今井晨介，小山田耕二．2016．「準バイクリークマイニングを用いたバイククラスタリング向けビジュアル分析」，第 44 回可視化情報シンポジウム（工学院大学新宿キャンパス），2016 年 7 月 20 日．口頭発表．
- 今井晨介，尾上洋介，宮野公樹，日置尋久，小山田耕二．2016．「視覚的クラスタ分析支援システムの開発」，第 44 回可視化情報シンポジウム（工学院大学新宿キャンパス），2016 年 7 月 20 日．口頭発表．
- 上辻智也，今井晨介，尾上洋介，鎌田穰，江原康生，小山田耕二．2016．「カウンセリングにおける会話の流れの可視化に関するユーザー評価」，第 44 回可視化情報シンポジウム（工学院大学新宿キャンパス），2016 年 7 月 20 日．口頭発表．
- Hideo Miyachi, Koji Koyamada, Daisuke Matsuoka, Isamu Kuroki. 2016. “Fusion Visualization System as an Open Science Foundation,” 19th International Conference on Network-Based Information Systems (NBIS 2016) (Ostrava, Czech Republic), 2016 年 9 月 9 日．口頭発表．
- 梅澤浩然，尾上洋介，夏川浩明，江原康生，小山田耕二．2016．「3 次元時系列データを用いた防災に資する因果推論」，可視化情報学会，可視化情報全国講演会（日立 2016）ワークショップ，2016 年 10 月 9 日．口頭発表．
- 小山田耕二．2016．「ネットコミュニケーション空間における問題動兆候発システム」，可視化情報学会，可視化情報全国講演会（日立 2016）ワークショップ，2016 年 10 月 9 日．口頭発表．
- Takashi Shimizu, Naohisa Sakamoto, Jorji Nonaka, Kenji Ono, Koji Koyamada. 2016. “Web-based Visualization System for Large-Scale Volume Datasets,” International Conference on Simulation Technology (JSST2016) (Kyoto University), 2016 年 10 月 27 日．口頭発表．
- Junxiong Ni, Yasuo Ebara, Koji Koyamada. 2016. “The Integrated Numerical Simulation and Visual Analytics of High Beam on Driving,” International Conference on Simulation Technology (JSST2016) (Kyoto University), 2016 年 10 月 28 日．口頭発表．

- Tomoya Uetsuji, Shinsuke Imai, Yosuke Onoue, Minoru Kamata, Yasuo Ebara, Koji Koyamada. 2016. “Construction on Visualization System of Flow of Conversation in Counseling,” International Conference on Simulation Technology (JSST2016) (Kyoto University), 2016 年 10 月 29 日. 口頭発表.
- Carl Becker. 2016. “Can spirituality transform our world? Has it new frontiers?,” British Assn. for Study of Spirituality (Manchester University), 2016 年 5 月 25 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「念仏者の生き方と往って生きるお浄土」, 浄土真宗勉強会 (滋賀県), 2016 年 6 月 20 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「ペットロスに関する一考察」, 科研会議 (東北大学), 2016 年 7 月 30 日. 口頭発表.
- Carl Becker. 2016. “Responsible Bioethics from a Japanese Perspective,” IACCP (国際比較心理学会), (名古屋大学), 2016 年 7 月 31 日. ポスター発表.
- カール・ベッカー. 2016. 「生きる力をどう引き出すか」, 学校教育相談研究大会 (京都市, 平安高等学校), 2016 年 8 月 5 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「生きがい感を如何に探せるのか」, 教育大学協会家庭部門大会 (金沢市), 2016 年 8 月 19 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「看護師を疲弊からどう守れるか」, ビハーラ学会 (京都市, 龍谷大学) 2016 年 8 月 26 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「宗教研究と地球環境問題-国際グローバル理解」, 日本宗教学会 (早稲田大学), 2016 年 9 月 9 日. 口頭発表.
- カール・ベッカー. 2016. 「介護者・看護師のストレスコーピング」, 第 40 回日本死の臨床研究会 (札幌コンベンションセンター), 2016 年 10 月 8 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「総合病院におけるスピリチュアルケア」, 総合病院精神医学会 (東京都, 日本教育会館), 2016 年 11 月 26 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2016. 「多様化するところと倫理」, こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門 2016 年度研究報告会「多様化するところと共生」(京都市, 稲盛記念館 3 階大ホール), 2016 年 12 月 11 日. 口頭発表.
- カール・ベッカー. 2017. 「『心』が患者を救えるか? 医療者を支え得るか?」, 広島皮膚科病院部会会議 (広島市, 広島ロイヤルホテル), 2017 年 1 月 29 日. 講演.
- カール・ベッカー. 2017. 「最後の一口はどこで?」, 愛知県歯科衛生士会 (名古屋市, 愛知学院大学), 2017 年 3 月 5 日. 講演.
- Suematsu Chihiro. 2016. “Entrepreneurship in Kyoto Style Management,” 2016 Entrepreneurship and SME World Conference, ICSB K Entrepreneurship Academy & Workshop (Seoul, Korea), 2016 年 4 月 6 日. 口頭発表.
- Suematsu Chihiro. 2016. “Kyoto Style Management,” 2016 Entrepreneurship and SME World Conference, Main Conference (Seoul, Korea), 2016 年 4 月 7 日. 口頭発表.
- Suematsu Chihiro. 2017. “Kyocera; A Case of Humane Entrepreneurship,” SME Entrepreneurship Conference (Seoul, Korea), 2017 年 3 月 29 日. 口頭発表.
- Ito, K., T. Ida, and M. Tanaka. 2016. “Information Frictions, Inertia, and Selection on Elasticity: A Field Experiment on Electricity Tariff Choice,” 39th Annual National Bureau

of Economic Research Summer Institute, Environmental & Energy Economics (Cambridge, Massachusetts, USA), 2016 年 7 月 26 日. 口頭発表.

Ito, K., T. Ida, and M. Tanaka. 2016. “Information Frictions, Inertia, and Selection on Elasticity: A Field Experiment on Electricity Tariff Choice,” Advances with Field Experiments 2016 (Chicago, Illinois, USA), 2016 年 9 月 15 日. 口頭発表.

Ito, K., T. Ida, and M. Tanaka. 2016. “Information Frictions, Inertia, and Selection on Elasticity: A Field Experiment on Electricity Tariff Choice,” Allied Social Science Association / American Economic Association (Chicago, Illinois, USA), 2017 年 1 月 7 日. 口頭発表.

Ito, K., T. Ida, and M. Tanaka. 2017. “Information Frictions, Inertia, and Selection on Elasticity: A Field Experiment on Electricity Tariff Choice,” Midwest Economics Association, (Cincinnati, Ohio, USA), 2017 年 3 月 30 日. 口頭発表.

伊勢田哲治. 2016. 「動物実験の倫理学」, 筑波実験動物研究会講演 (つくば市, 文部科学省研究交流センター), 2016 年 6 月 3 日. 講演.

伊勢田哲治. 2016. 「フォード・ピント事件をどう教えるべきか—叙述の正確さと教材としての有用性の狭間で—」, 名古屋工業大学技術倫理研究会第 34 回講演会 (名古屋工業大学), 2016 年 7 月 27 日. 講演.

伊勢田哲治. 2016. 「近現代の科学哲学の流れ」, 第四回量子基礎論懇話会 (情報システム研究機構会議室), 2016 年 7 月 11 日. 口頭発表.

Iseda, Tetsuji. 2016. “Philosophical reflections on research integrity in the global context,” Research Integrity Workshop (University of Bristol), 2016 年 9 月 16 日. 口頭発表.

伊勢田哲治. 2016. 「集約的畜産について倫理学の観点から考える」, 第五回秋田哲学塾「われわれは肉をボイコットすべきか—集約的畜産の倫理的是非—」 (秋田市, カレッジプラザ), 2016 年 9 月 25 日. 講演.

伊勢田哲治. 2016. 「社会における研究者の情報発信の役割—よりよい双方向コミュニケーションのために—」, 第 50 回日本実験動物技術者協会総会 第 50 回記念企画「動物実験を市民目線で伝えるには」 (ウェスタ川越), 2016 年 10 月 1 日. 講演.

伊勢田哲治. 2017. 「科学的であることの価値を考える」, 第 24 回農芸化学 Frontiers シンポジウム「科学リテラシーと農芸化学を考える」 (KKR 京都くに荘), 2017 年 3 月 21 日. 講演.

小嶋大造, 明村聖加. 2016. 「日本の長期推計に基づく介護費用のシナリオ分析」, 財政学研究会 (京都大学), 2016 年 9 月 1 日. 口頭発表.

小嶋大造. 2016. 「政策形成の財政的特質—農政策からみて—」, 財政学会第 73 回全国大会 (京都産業大学), 2016 年 10 月 22 日. 口頭発表.

二木史朗. 2016. 「生命を支えるペプチド: そのはたらきと可能性」, 京都大学化学研究所講演会 (京都大学宇治キャンパス), 2016 年 10 月 23 日. 講演.

講演会、展示会などのアウトリーチ活動

川上浩司. 2016. 「臨床研究と医療データベース」, 鉄蕉会亀田総合病院 (千葉県), 2016 年 5 月 21 日. 講演.

川上浩司. 2016. NHK18 時ニュース「名古屋市が子宮頸がんワクチンの安全性解析を断念」, 2016

年6月26日．インタビュー．

川上浩司．2016．「電子カルテ由来の診療情報および自治体健診情報の利活用の取組」，国際モダン
ホスピタルショウ2016（東京都），2016年7月13日．講演．

川上浩司．2016．NHK21時ニュース「子宮頸がんワクチンで副反応 国と製薬会社を提訴」，2016年
7月27日．インタビュー．

川上浩司．2016．「医療リアルワールドデータによる臨床研究の大転換」，鹿児島大学病院（鹿児島
県），2016年8月3日．講演．

川上浩司．2016．TBS-BS「密着！命の現場最前線」，2016年12月4日．コメンテーター．

川上浩司．2016．「リアルワールドデータおよびライフコースデータによる新しい臨床研究」，日本
臨床疫学会設立記念講演会（東京都），2016年12月18日．講演．

川上浩司．2017．「安全性評価から臨床評価，健康福祉社会へと展開するリアルワールドデータと薬
剤疫学」，大阪医薬品協会安全性委員会（大阪市），2017年1月20日．口頭発表．

川上浩司．2017．「乳幼児健診、学校健診情報の可視化とライフコースデータの活用状況」，神戸市
地域保健事業関連研修会（神戸市），2017年1月26日．講演．

川上浩司．2017．「未来の臨床研究のための医療データベース基盤構築」，京都大学 CLiP extension
（横浜市），2017年2月11日．口頭発表．

川上浩司．2017．「医療リアルワールドデータと健康ライフコースデータの基盤構築」，メディカル
ジャパン（大阪市），2017年2月17日．口頭発表．

川上浩司．2017．「リアルワールドデータ(RWD)を用いた臨床評価の基盤整備」，日本製薬工業協会臨
床評価委員会（東京都），2017年2月22日．口頭発表．

中山建夫．2016．SDM フォーラム（京都大学東京オフィス），2016年8月25日．口頭発表．

中山建夫．2017．厚生労働科学・戦略研究公開フォーラム（東京大学福武ホール），2017年2月8
日．口頭発表．

カール・ベッカー．2016．「中堅管理職の医療倫理」，医療倫理研修会（武田病院，京都市），2016
年4月28日．講演．

カール・ベッカー．2016．「生と死を考える」，未来創成学国際研究ユニット（パナソニック国際交
流ホール，京都市），2016年5月10日．講演．

カール・ベッカー．2016．「今を生き，明日をいきる」，いのち教育セミナー2016（上越教育大学，上
越市），2016年6月10日．講演．

カール・ベッカー．2016．「看取りを考える，緩和ケア/在宅医療の看護師」，日本財団（東京都），
2016年6月12日．講演．

カール・ベッカー．2016．「終末期の仏教的スピリチュアルケア」，JSSC太融寺（太融寺，大阪
市），2016年7月15日．講演．

カール・ベッカー．2016．「超高齢社会を生きる～日本人の死生観を活かす」，老人看護学会（大宮
市），2016年7月24日．講演．

カール・ベッカー．2016．「日本仏教とグリーフケア」，悲嘆シンポジウム（稲盛記念館3階大ホー
ル，京都市），2016年9月15日．講演．

カール・ベッカー．2016．「これからの医療とまちづくり」，MOA金沢（金沢市民ホール，金沢市），
2016年10月15日．講演．

カール・ベッカー．2016．「終末期介護を考える：SOC，ACP，EOL」，ライフ・イン京都30周年記念

- 会（ライフ・イン京都，京都市），2016 年 10 月 25 日．講演．
- カール・ベッカー．2016．「日本人の死生観と出雲」，古代出雲歴史博物館・上廣歴史文化フォーラム（古代出雲歴史博物館，出雲市），2016 年 11 月 27 日．講演．
- カール・ベッカー．2017．「中堅管理職の医療倫理」，医療倫理研修会（武田病院，京都市），2017 年 1 月 24 日．講演．
- カール・ベッカー．2017．「生老病死 輝くいのちを見つめて-日本的仏教的スピリチュアルケア」福岡ビハーラ公開講座，本願寺派福岡教区ビハーラ福岡（本願寺福岡教堂，福岡市），2017 年 2 月 22 日．講演．
- カール・ベッカー．2017．「心の対話と心のケア-患者理解と介護疲弊」，大分教区ビハーラ公開講座（大分県立総合文化センター，大分市），2017 年 2 月 25 日．講演．
- 依田高典．2016．「日本版 BID を含むエリアマネジメントの推進方策に関する検討会」「エリアマネジメントについて 現状・効果・推進策」（内閣府及び内閣官房主催）2016 年 5 月 13 日
- 依田高典．2016．「エリアマネジメント勉強会」，エリアマネジメントについて 現状・制度と今後の展望（株）まちづくり三鷹主催），2016 年 5 月 20 日
- 依田高典．2016．「まちづくりにおける新たな官民連携『エリアマネジメント』」，東大阪市エリアマネジメント研修（東大阪市主催），2016 年 8 月 8 日
- 依田高典．2016．「景観・屋外広告物行政の近年の展開について」，東海広告美術業組合連合会主催），2016 年 8 月 25 日
- 依田高典．2016．「まちづくりにおける新たな官民連携『エリアマネジメント』」，平成 28 年度三部会（公益社団街づくり区画整理協会主催），2016 年 11 月 11 日
- 依田高典．2016．「まちづくり・まち経営」，東大阪市研修（東大阪市主催），2017 年 2 月 16 日
- 依田高典．2016．「まちづくり等における多世代交流・継承を考える」，国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）-社会技術研究開発センター（RISTEX）助成プロジェクト「まちづくり（エリアマネジメント）と多世代交流と継承」（「ソーシャル・キャピタルの世代間継承メカニズムの検討」研究開発プロジェクト主催），2017 年 2 月 4 日
- 宮野公樹．2016．「異分野融合，内と外」，大阪大学生体制御ネットワーク医学教育プログラム Meet the Leaders，2016 年 7 月 19 日．講演．
- 宮野公樹．2016．「異分野融合で育む<知>の文化」，JT（日本たばこ産業）幹部講演，2016 年 9 月 12 日．講演．
- 宮野公樹．2016．「異分野との出逢い」，京大生協一回生向け企画 X-academy 第 4 回，2016 年 10 月 10 日．講演．
- 宮野公樹．2017．「サイエンスのゆくえ」WIRED 発売記念ミニカンファレンス パネリスト，2017 年 2 月 27 日．パネル発言．
- 伊勢田哲治．2016．「IT と生命操作技術による人類へのインパクトへの懸念」，公開シンポジウム「フロンティアを目指す，サイエンスとアート」「情報技術と生命操作技術の拡大による「人類観」の変容」（東京都・学術会議講堂），2016 年 6 月 27 日．セッション話題提供．
- 伊勢田哲治．2016．「多様な視点から見ることの意義：社会認識論のすすめ」，第 56 回生命科学夏の学校シンポジウム「これからの「多様性」の話をしようー多様性社会を生き延びるための〇〇」（宮城県白石市・小原温泉旅館かつらや），2016 年 8 月 27 日．講演．
- 伊勢田哲治．2016．「社会における研究者の情報発信の役割ーよりよい双方向コミュニケーション

のために一」第 50 回日本実験動物技術者協会総会，第 50 回記念企画「動物実験を市民目線で伝えるには」(埼玉県・ウェスタ川越)，2016 年 10 月 1 日．講演．

伊勢田哲治．2016．「宇宙の道と人の道—天文学者と倫理学者の対話」，第 9 回宇宙学セミナー（京都大学理学研究科セミナーハウス），2016 年 10 月 24 日．対談．

伊勢田哲治．2016．「「レポートの哲学」の有用性」 公開研究会「学生を思考にいざなうレポート課題とは？」，TKP 京都四条烏丸カンファレンスセンター，2016 年 12 月 18 日．合評会コメント．

伊勢田哲治．2017．「対談 不確実性の拡大とその対応 他領域の知見から探る 第一回」，保険毎日新聞，2017 年 2 月 9 日．対談．

市川正敏．2017．「お茶とコーヒーの科学」「生命と自然 —科学と技術の最前線—」，静岡県立大学 一般公開 市民勉強会（静岡県立大学草薙キャンパス），2017 年 3 月 4 日．講演．

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2016

2018年1月31日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)
URL <http://stips.jp/>
E-mail stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp

活動報告 2016
2018年1月31日発行

